
タランティルスの例外少年

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タランティルスの例外少年

【Nコード】

N7043X

【作者名】

アセット

【あらすじ】

センターハート家の従者でありながら、学園に通うロイ。彼は、落ちこぼれ扱いを受けながらもセンターハート家の護衛権の従者として学園生活を送っていた。

彼は持ち前の天賦の才を発揮し誰にも屈しない強さを求めた。守りたい人達の為に。

これは人間の「例外」の物語

プロローグ（前書き）

よろしく願います。

プロローグ

ある男がいた。それは捨て子で記憶喪失で不幸な少年だった。しかし、そんな少年にも僅かに幸せを見出せるものがあつた。

それは強くなること。どんな不幸や理不尽をも弾きとばす圧倒的な力を手にすること。どんな蔑みや嘲笑をも吹きとばす絶対的強者になること。

これは不幸でも嗤われても落ちこぼれでも決して諦めずに最強を求めた少年の物語。

舞台は魔法と剣術とが生きていく為のステータスになるファンタジーの世界タランティルス。

彼はここで最強を目指すー

プロローグ（後書き）

頑張ります。

第一話（前書き）

プロローグが説明だった・・・

第一話

「今日も学園かぁ・・・」

そうばやいているのは、ロイ・カーレス。

つまり俺である。俺の紹介をさせてもらうとある貴族のウチのタダ飯喰らいという肩書きしか無くそこが世知辛いところではある。

しかしそんな俺にも夢がある。それは強くなること。なぜ強くなりたいのか？

そんな疑問には簡単に答えられる。それは捨て子だった俺を拾ってくれた人達や大切な人に恩返しをするためだった。

「荷物持ち。なにばやいてるの！！さつさと学園いかないと遅刻するわよ！！」

そう怒鳴ってきたのは俺が厄介になっっている貴族の家のお嬢様だった。名前はアメリカ・

アイラス・センターハート。容姿端麗で優等生。黒髪の美少女である。この家に拾われなかったら、会うこともなかったであろう人種だと思う。

俺はアメリカに

「学園の準備でおくれました。それでは学園へ向かいましょう。」

「ええ。じゃあこの荷物お願い。私じゃ重くて。まあ、落ちこぼれには荷物持ちがお似合いね」

アメリカお嬢様は優等生だが落ちこぼれの俺には割と冷たい。まあ魔法と剣術の才能が俺にはまったくなかったから仕方ないかもしれない。

「はい。お持ちします。」

そういつてアメリカお嬢様から登校鞆を受けとる。お嬢様は守りたい人なので、ムカついたりはしない。それに俺を拾ってくれた大恩人の娘様を無下にもできない。

だから俺は学園でも家でもお嬢様の従者となっている。

俺は記憶喪失でセンターハート現当主ラザイン様に拾われた以前の記憶がない。だからこの立場も甘んじて受け入れている。

「じゃ、早く行くわよ落ちこぼれ！」

「はい、お嬢様」

そういつて俺達は学園に向かった。

第一話（後書き）

唐突すぎたかな？拙作ですが、応援おねがいします。

主な登場人物（前書き）

登場人物紹介です。随時更新していくつもりです。

主な登場人物

ロイ・カーレス

寡黙で冷徹に思えるが心は暖かい人物。幼少期にセンターハート家現当主ラザインに拾われた黒髪の少年。15才の割には魔法や剣術を使いこなせていない落ちこぼれ。努力家である。よく見ると顔は整っている。ロイという名前は便宜上必要だから、自分でつけた。階級は平民。使い魔はサタン。

アメリカ・アイラス・センターハート

容姿端麗で優等生の美しい少女。ロイには厳しいが他の者には優しい。ロイに厳しいのはこの世界でのステータスである実力がないという理由だけ。平民だからといって差別する人格ではない。ロイの境遇は知っているので若干応援している？凜とした少女で基本的に

優しい。15才。階級は上流貴族。使い魔は炎龍。

ラザイン・アイラス・センターハート

人格者。徳のある人物。妻が亡くなって傷心中の時、心の傷を舐め合うようにロイを拾った。

た。現在のセンターハート家の当主。魔法や剣術をかなり使いこなせる。しかし魔法や剣術をあくまで交渉の手段としてしか極力使うとはしていない。ロイの修行をたまに手伝っている。平和主義者42才。階級は上流貴

族。男。

レーナ・サンホープ・センターハート
故人。ラザインの妻。アメリカと似て黒髪の
美女である。

リーゼ先生

男の優秀な先生。本名は生徒達にも教えていない。リーゼは偽名ではないらしいが・・・
ともかく自分をオープンにしない人。イケメン。かなりの実力者。

ケイル・ギンター・リバイル

男。15才。ロイを馬鹿にしている。正確には落ちこぼれ扱いをしている。実力はアメリカには及ばないが、中々の実力を持っている。
中流貴族。使い魔は風龍。

サタン・ホーリーナイト・イエスタデイ

悪魔と聖なるものの名を持つロイの使い魔。
使い魔の中ではトップクラスの実力。しかし、ロイの魔力量が少ないので、黒猫としての姿でしか顕現出来ない。本来は金髪の美しい美女。数千年の時を生きている。

主な登場人物（後書き）

見ておいた方が物語がわかりやすいかもしれません。作者の文才が無い為に苦勞をかけます。

第二話（前書き）

第二話です。会話文少なめかもしれないです。

第二話

ここはセントラル魔法学園。毎年優秀な人材が輩出される進学校である。なぜ俺がこの学園に通えているのかというと、お嬢様のおかげだ。詳しく説明させてもらうとアメリカお嬢様は貴族の中でも上流貴族である。上流貴族は一人だけ家から特別に従者を連れていくことができる。

これを「護衛権」という。

まあ、普通の護衛権で学園にきた従者たちは年配の人も多いし、実力が高い人も多い。つ

いでに説明させてもらうと普通の従者は学園には通えない。護衛権で来た従者たちは基本的に学園の外で貴族たちの要請があるまで待機している。

俺が学園生活を送れるのは実質ラザイン様のおかげだ。従者で平民な俺でも学園に通えるのは幸運なのだろう。クラスメイトからの待遇は厳しいが。

そんな事を思いながら、お嬢様と共に教室に入る。クラスは1 - Aである。

「おはよう。みんな。」

こう言ったのはアメリカお嬢様。

「おはよう。アメリカさん。」

クラスメイトから羨望の眼差しをうけながら
あいさつに返答されている。

一方俺は・・・

「よう。魔力の知識も低いし剣術の心得も全然ない落ちこぼれの平民従者君」

無論、落ちこぼれとは俺の事だろう。

「はい。おはようございます。ケイル様」

まあ、護衛権の従者だから、当たり前障りのない返答しておく。

「うわ。あれがアメリカさんの護衛権の従者だと思うと可哀想だよね」

「實力もないし、学もあまりないからな。なぜあんなのをなぜ護衛権の従者にしたのか・・・センターハート家の七不思議の一つだな」

「どうやら俺、七不思議になっちゃったみたいだ。」

「ていうか、我ながら酷い言われようだな。お嬢様もこちらを睨んでいるように見えるし。まあこの世界はほぼ実力が全てだから、仕方ないかもしれないけどな。」

「しかし、俺には強くなるという目標がある。これはセンターハート家に拾われた時、俺が誓ったこと。」

「目標がある奴は強くなれるというのがおれの持論だ。おれが目指すのは圧倒的な力。やるからには、最強を目指そうと思う。自分を磨くことが今の俺の唯一の娯楽だし。」

「そう思っているなか、俺は一人静かに呟いた。」

「絶対に強くなって・・・人並みの幸せを手に入れてみせる。そして、センターハート家に恩返ししてみせる」

実力が上がれば平民でもこのタラントイルスという世界ではのし上がれるからな。恩返しも何か出来るだろう。

俺は決意を新たにした。

そのすぐ後、1-Aの教師らしき人物が教室に入ってきた。

第二話（後書き）

ある程度状況説明が終わったなら、会話を多めにしたいです。

第三話

「これからSHRをはじめる。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

学級代表のお嬢様が先生の呼び掛けに答え、皆も

「「「礼。」」」

と答える。生真面目なクラスだなあ〜と俺は思っていた。
いや、この位普通か？

まあ、そんなことはいいか。

しかし、今思ったがリーゼ先生ってすごい若いな。あ、リーゼ先生

は担任のことだ。

あんな年で由緒正しいセントラルの先生になれるなんて凄いことだよな。

俺が成長したら、手合わせして貰おうかな。

「これで終わります。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

「「「礼。」」」

おっと、一人思案にふけていたら、何時の間にかSHR終わってた。

一人、礼をする時起立しなかった俺は不要な注目を浴びていた。

「落ちこぼれが態度まで悪かったらお終いだな」

そつこぼすのは中流貴族のケイル。

「すみません。一人思案にふけていました」

まあ、俺は当たり障りのない返答をした。

「ま、おまえの事なんてどうでもいいがな」

そういつて嫌な笑みを浮かべながら教室を立ち去るケイル。

俺は内心イラっときました。しかし、まだ力がない。まあ、俺の努力次第であいつを見返せるかは変わってくるわけか。

ん？　そういえばなんでケイルは教室から出ってたんだ？

「今日の日程はSHRだよ。荷物持ち。ということで、鞆をよろしく。」

とお嬢様から声が掛かる。

「わかりました。お供したほうがよろしいでしょうか。」

「あんたのお供？ いらないわ。友達と帰るから。じゃあね、荷物持ち。」

とスタスタ教室を出ていった。なんか寂しい・・・

心に寒風が吹きすさぶ。

おれはネガティブなのかもしれないな。

入学間もないから授業らしい授業もないし俺も今日は帰るか。

セントラル魔法学園高等部で俺はやっていけるだろうかと落ちこぼれ扱いを受けている俺は不安に思った。

第四話

俺はセンターハート家の屋敷の中庭でいつものように俺の恩人ラザイン様に修行をつけてもらっていた。

「脇が甘いぞロイ君」

「くっ！」

そういつてラザイン様の剣術受けている俺。

ラザイン様は普段は人格者だが修行となると厳しく教えてくれる。本当にたまにしか修行してくれないからそこが残念だ。まあ多忙な方だし仕方ないな。

修行が厳しいのは俺にとっては嬉しいことだった。俺からラザイン様に頼んだことだし、何より俺が強くなりたかったからだ。

「しかし、ラザイン様の剣術は凄いです。剣筋が見えませんでした。」

「

「まあ、手加減せずに打ち込んでいるから当然だよロイ君。」

「しかし、君は凄いね。剣術と魔法を全く知らない半年前から凄い勢いで成長しているよ。」

「何せ、私の全力の斬撃を感覚的にでも防げているのだから。魔法に関しても初級魔法ならかなり使えるし本当に凄いと思う。」

そう！そうなんです！俺は半年前から魔法と剣術を学び始めたばかり。

つまり、学園に入る僅か前に修行をはじめたばかりなんだ。

まあ俺はセントラルの中部ましてや他の学園にも入っていないことが知られているから落ちこぼれとして見られているが、

ラザイン様曰く、俺には

「天賦の才があると思うよ。君には。もし君がアメリカや他の貴族の様に幼少期から英才教育をつけていたら、その実力は多分アメリカを抜いていたと思う。」

そんな事をいわれたら、やる気が出てこないわけがない。

どうやら、俺は潜在能力とやらが人より高いらしい。

「少しでも希望も見えてきました。ラザイン様ありがとうございました。もう少し修行を続けてもらっても構いませんか？御多忙なのは承知しています。けれど、お願いします！」

「私は構わないよ。ロイ君。」

「じゃあ次は魔法の修行だ。」

「はい！」

（・・・しかし、ロイ君は努力を惜しまない天才型か・・・これは教えている私も楽しみだ！）

ラザインは一人そう思っていた。

世界観説明（前書き）

セントラル魔法学園高等部の在学期間は3年を想定しています。物語中に自然に入らないと思うので、書いておきます。作者の文才が無いばかりに迷惑をかけます。

世界観説明

この物語の舞台はファンタジーの世界タラントイルス。ここは様々な魔法に満ち溢れている世界。魔法の凶悪さの度合いつまりランクを挙げていくと、

初級魔法

中級魔法

上級魔法

最上級魔法

未開拓魔法

となる。

最上級魔法があるのにその上のランクの魔法があんの？って感じではあるが、これはタランティルスの住人が未だにその魔法の領域に踏み込めていないことから、未開拓魔法と畏怖を込めて言われている。

魔法のランクの見分け方は純粹に流れている魔力量の多さで分かる。

この世界の魔法は詠唱を必要としていない。しかし、その代わり払わねばいけない対価がある。

それは気力。つまり精神力。魔力も対価に含まれている。もちろんランクが高いほどその対価は大きい。

この世界の戦闘は魔力も重要だが、気力といわれるものも重要なようだ。

これらの配分が戦闘では重要なのだろう。

次にこの世界のステータスに大きく関わる概念、剣術についての説明をしようと思う。

剣術は純粹に力と体力を消費するだけのものと思われがちだが、高度なものとなると魔法を発動する時にも使った気力を消費することになる。

武器は剣や杖を両方持つものが多い。

この世界には、魔武器というものが存在している。これもまた剣や杖といった形状が多い。この魔武器は中等部の頃に魔武器契約の魔法で取得するものだから、主人公のロイだけ現在魔武器を持っていないことになる。

次は使い魔についての説明をしたいと思う。

使い魔は高等部で習う、いや、習うというより契約するものだ。契

約の時出てくる使い魔の實力は契約者の潜在能力に比例しているという。

使い魔の詳しいランクは決まっていない。

人間に深い繋がりを持つ使い魔だが、詳しい事はよくわかっていない。何れ使い魔と対話出来る人物が全てを解き明かしてくれるのかもしれない。

最後に軍とギルドについての説明。学園を卒業した後にはほとんどの人がこの二つのところに「就職」という形で入ることになる。

軍は国の自衛や戦争の為に備えている組織。

ギルドは国中の依頼や戦争の予備戦力としての役割を果たしている組織である。

世界観説明（後書き）

大まかな世界観説明はこれで終了。大体タラントイルスの構想はこんな感じです。

第五話（前書き）

第五話です。どうぞ。

第五話

ラザイン様との修行の後の翌朝、アメリカお嬢様の荷物をお持ちしていつも通り学園へ向かった。

今日から授業が本格的に始まる様だ。半年間の努力のおかげで魔法と剣術の基礎知識ぐらいいは覚えている。まあ、授業面においては心配は余りなかった。

ただ心配だったのは・・・

「そういえばあんた魔武器持ってなかったわよね？実技は大丈夫なの？」

そう。俺には自分の専用武器ともいえる魔武器がないのだ。普通は学園の中等部の頃に授業で手に入れるらしい。

「若干心配ではございます。お嬢様。しかし、リーゼ先生も私が魔武器を持っていない事を知っておられます。放課後にでもリーゼ先

生に魔武器契約がしたいと言って契約してきますよ。心配ありがとうございます」

「誰が荷物持ちの心配なんかしてるのよ。誰が。私はただセンターハートの関係者であるあなたの失態で家の家名に傷を付けられたくないだけよ。わかった？」

おおつ。冷たい。

「わかりました。お嬢様」

「わかればいいの」

と、いった会話をしながら学園向かう俺。しかし、今日はいい日だ。ん？何故かって？

お嬢様が俺と会話をしてくれてるからだよ！

お嬢様は普段はゴミを見るような目つきで俺を見ています。

今日は扱いがましな方だ。機嫌がいいのかな？まあ、俺にはあまり関係ないが。

そして授業1時間目。魔法理論の座学の時間。いきなり、俺はリーゼ先生に授業中質問された。

「ロイ君。魔法を行使するときに安定するのは杖と剣どちらかな？」

このくらいは解る。

「杖です。理由は剣でも魔法を行使することはできますが、杖と比べて、魔法の精度は落ちるからです」

ラザイン様との予習？いや復習？で学んだ知識だ。間違っではないな
いはず。

「その通りです。だから、魔法主体で戦う事になるときは剣ではなく杖で戦うと良いでしょう。使い魔契約が終わったらすぐ模擬戦もありますので、この事は覚えておいて下さい」

と、リーゼ先生。

ていうか、模擬戦あんの？成績に入るよなあきつと。魔武器をまだ触ってすらいない俺には不利な気がする。今日放課後、絶対に魔武器と契約して修行しなくちゃいけないな。

「では、次にアメリカ君。魔法を行使するときの対価と言われているものは？二つ挙げてください。」

おっとまだ授業中か。

「はい。魔法を行使するときを使う対価とは気力と言われているものと魔力です。魔法のランクが高いほどその対価は大きくなります。気力とは精神力と言い換えてもいいと思います。」

と、完璧な答えを返すお嬢様。流石。従者としての心得ばかりを教えられた俺とは違うな。少し嫉妬しちゃった。

「完璧、か流石はセンターハート家といったところですね」

と、リーゼ先生。

「さて、今日の新しい知識として魔法の詠唱について先生から説明したいと思います。」

「皆さんは、絵本の勇者の伝説というお話などを読んだ事はありませんか？きつとあるでしょうね。一人の勇者が国を救う話です」

俺は読んだ事ないな・・・まあ、小さい頃は慣れない従者としての知識を覚えるのに必死だったからな。

「この物語で登場する勇者は魔法を唱える時に詠唱と呼ばれるものをしています。しかし、我々の世界の魔法は詠唱を必要としていません。魔法と慣れ親しんだあなた達は当然知っている筈です」

俺も知ってるな。この世界の魔法は魔法名を唱えるだけで行使できる。

ただ・・・

「しかし、その代わり絵本とは違い魔力だけでは魔法を行使することとは出来ません。前述の通り気力と言われているものも消費しないといけません」

詠唱はないが、気力は消費するってことだな。まあ、新しく習う事といっても皆もこのくらいの知識は有るだろう。

「ここからが注意して聞いて欲しいところです。」

リーゼ先生が声を潜めた。

「詠唱がないからといって魔法を行使し過ぎると、気力が無くなり気絶します。最悪、死に至ります。魔法名をいっただけで簡単に魔法を行使できるので、注意してください。これが原因で学園で死者が出たこともあります。まあ、魔法名を覚えても顕現させるまでは修行が必要ですが。」

魔法の使い過ぎ〓死or気絶ってことか。
俺も注意が必要だな。

「これで授業を終わります。学級代表！」

「起立。気をつけ。礼。」

あ、お嬢様は学級代表だったな。
まあ、とりあえず関係ないか。

みんなも礼をして次の授業に備えている。

まあ、今日は座学だけみたいだから、とりあえず乗り切れるだろう。

ああ、さっさと放課後になって魔武器と契約したいなあ。

第五話（後書き）

世界観説明を飛ばした人も理解できる様に頑張りました。 気といわれるものはこの世界の戦闘では重要になってきます。

第六話（前書き）

第六話、どうぞ。

第六話

放課後―

「やっと授業がおわった・・・」

俺は一人そう呟いていた。

お嬢様には先に帰って貰った。というより、気づいたらお嬢様はもう帰っていた。まあ、今日の朝、放課後に魔武器との契約を先生に手伝ってもらうと言っておいた筈だから、それで帰ったのだと思う。

まあお嬢様からは俺は単なる荷物持ちの従者程度にしか認識されていないからな。

魔武器との契約が終わるまで待っていてくれたりはしないか。なんか虚しい。

閑話休題。

話が脱線していた。今はリーゼ先生に魔武器契約の仲立ちを頼んだ

ところだ。リーゼ先生の反応は、

「うん？魔武器契約をしていないのかい？確か魔武器って中等部の時に・・・ああ！君がセンターハートの護衛権の従者、噂のロイ君か！」

反応がうざい。リーゼ先生はもっと凜とした先生だと思っていたのに。

「わかった。君の事情は知っている。協力しよう。」

「ありがとうございます。」

いきなり先生の雰囲気が凜としたものに変わった。男の若いながらも威厳のある表情だ。
公私の使い方もわきまえている様だ。やはり素晴らしい先生だと思う。

特別準備室―

「ここが特別準備室だよ。ロイ君。君にはここで魔武器と契約してもらおう。覚悟はいいかい？まあ、覚悟なんてものは実はそんなに必要ない。それに特別な儀式や魔法を使う訳ではないしね。」

「そうなんですか？」

「そうだよ。ロイ君。魔武器との契約はそんなものなんだ。だからといって気を抜いてはいけないよ。一生支え合うものだからね。魔武器と人間は。使い魔並に重要なんだよ？わかったかい？」

わかりやすい説明だった。魔武器は重要。気は抜くなっただけか。

「わかりました。では、先生、魔武器との契約方法を教えてくださいませんか？」

「わかった。今、教える。実は魔武器との契約には特別な儀式、魔法、道具は一切必要ないんだ。これはさっきも言った筈。重要なのは意思の力。思いの力。精神力。いわば、気力。つまり、魔武器契約で使うのは気力なんだ。」

気力か。あんまり意識したことはないな。

「まだ説明を続けると、魔武器と契約するには念じるんだ。」

魔武器に関して、素人な俺はよくわからなかった。

「念じる？念じるとはどういうことですか？」

「わかりづらかったかな？念じるとは、ただ自分の心に働きかけるんだよ。魔武器よ・・・来い！ってね。簡単だろ？」

「確かにそれだけなら、簡単です。早速自分の心に働きかけてみます。」

「私はあくまで、仲立ちしかできない。まあ、危険もないし、全力を出してこい。」

「はい！では・・・いきます！」

その瞬間凄まじい量の光の奔流が特別準備室を覆っていた。

「くっ！マジック・ガード！」

リーゼは咄嗟に魔法を行使して自分の身を守っていた。

（なんだ・・・この気力量は・・・気力が具現化する程の気力量なんて・・・）

リーゼはそんなことを思い、光の奔流を見ていた。

光の奔流の中で――

「なんだ？この白い部屋は？」

いや、部屋というよりは・・・

「暖かい光の中みたいだな。」

ん？俺の見つめる先に一つの剣が光に突き刺さっていた。

「なんか神秘的ですらあるな。リーゼ先生もいないし。ここだけ世

の中と離されたみたいだ。」

まあ実際はそんなことなく、ただの比喻だけど。そう思いながら多分俺の魔武器であるその剣を握ってみた。

握った瞬間―

「うっ！何だこれ！頭が！頭が焼ける様に熱い！」

俺の脳にこの魔武器の情報が流れてきていた。

「はあ、はあ、終わったか・・・」

間違いないこの剣は俺の魔武器だろう。全身全霊をかけてだしたこの剣が俺の生涯のパートナーとなるだろう。

この青白い光芒を放つ美しい刀身をもつ剣の名は気仙花^{けせんか}能力は気力を纏うことができ気力を纏ったら斬撃の威力が増加するようだ。さらに魔力とも相性が良く魔力も纏える様だ。

試しに光の奔流の中で魔力を込めてみる。さっき気力をかなり使ったから今度使うのは魔力だ。そうすると気仙花^{けせんか}の刀身が青く輝き出した。

「良く切れそうな剣だなあ・・・なんか感動」

自分が落ちこぼれじゃ無くなったみたいだ。まあ世間からみたら、今まで学園に通っていない俺なんて落ちこぼれなんだけどな。

そして、俺はこの魔武器、気仙花のとおきのおきの必殺技の能力を試そうと思う。

その能力の名は「不可視の斬撃」。

簡単に説明すると、遠隔攻撃能力ということになる。詳しく説明すると、気力や魔力が纏っている斬撃を飛ばすことができる能力だ。しかも能力の名の通りその斬撃は視えることはない。つまり、見えない遠隔攻撃能力がこの気仙花にはあるということだ。

てか、強くな？見えない衝撃波飛ばせるんだぜ？皆もこれと同じような魔武器もってんのかな？

「学園が怖いと心の底から思ったよ・・・」

まあ、最強を目指している俺だ。怖いと思うが気後れなんてしてられない。

とりあえず、この気仙花の能力「不可視の斬撃」を試すことにした。

「オラァ！」

と俺にあんまり似合わない気合いの声を出して回復してきた氣力を気仙花に込めてその斬撃を横に薙いだー

特別準備室ー

（ロイ君遅いな・・・あの光の中で何が起こっているんだろうか？）

一人リーゼは思っていた。

ん？なんか光の奔流がモーゼの様に真ん中から裂けてくな。

その瞬間ブオオオンという音とともに特別準備室の壁が壊れた。

あれ？特別準備室の壁の一部が壊れたの・・・か？

光の先には剣を握っているロイが立っていた。マジック・ガードを解きロイに近づくリーゼ。

「その様子だと魔武器とは契約できたみたいだな。」

と、轟音に驚きながらも言うリーゼ。

「契約したのかはわかりませんが・・・魔武器を手にするのはできだと思います。」

「なら良かった。」

しかし、ロイは思う。光の奔流ごと特別準備室の壁を壊した「不可視の斬撃」。とても恐ろしい能力だなと。

（いつも平靜なリーゼ先生も少なからず驚いているみたいだな。ていうか、壁の修理代とかヤバイ。俺じゃ払えない。もしかしたらまたセンターハート家に迷惑が・・・そしてお嬢様から突き放した様な目で見られるのか・・・最悪な負のループだな）

ロイは結構真面目な事を考えていた。
一方、リーゼはこんなことを思っていた。

（やっぱりただの魔武器じゃないみたいだな。頑丈な特別準備室の壁を破壊する威力の攻撃を産む美しい刀身の剣か・・・ロイには落ちこぼれという認識しかなかったが、ロイは一体何者だ？あの気力量は学生が出せるものじゃないぞ。調査が必要・・・か？）

「そういえば、先生。魔武器をしまうのにはどうすればいいのですか？」

「あ・・・ああ・・・魔武器をしまうには魔武器よ消えろ！と念じるだけでいいぞ。」

「わかりました。」

魔武器よ消えろと念じて俺は気仙花を消した。

「あと一つ聞きたいのですが、壁の修理代は・・・？」

不安そうなロイ。

「学園長に報告するが、センターハート家に迷惑がかかる事は無いと思うぞ。もちろんお前が修理代を払う事も無い。この学園は授業中に起きた事故で学園の物品が壊された場合生徒に弁償はさせず、学園が負担することになってるからな。」

「でも、先生今は授業中じゃな・・・」

「授業中ってことにしとくよ。」

と、俺の言葉を遮りニツと笑いながら言うリーゼ先生。
本当に素晴らしい先生だ。

「ありがとうございます。俺はこれで帰らせていただきます。」

「わかった。明日は使い魔召喚ってことを忘れずにな。」

「はい。わかりました。」

リーゼ先生に背を向け屋敷に帰る俺。少し自分の力というより魔武器のおかげだが力が上がった気がして喜んだロイだった。

第六話（後書き）

魔武器契約の話でした。どうでした？リーゼ先生は様子見って感じ
です。

第七話（前書き）

主人公は既に気力だけだったら、化け物レベルです。

第七話

俺は学園から帰ってきていつもの様に従者としての業務を果たした後、夜の修行をしていた。ラザイン様がセントラルの街に出掛けていて、いないので必然的に俺一人で屋敷の中庭で修行をしている。

今日は魔武器に慣れるための修行しかしていない。そのおかげで気仙花を自分の手足のように振るえるようになった。

魔力の青き光芒と気力の白き光芒が中庭を走る。その風景は幻想的ですらあっただろう。

その修行を見ていたアメリアが思わず、従者の少年に声をかけてしまった。

多分、ラザインが街に出掛けていることもあったからだろう。アメリアはともかくロイに声をかけた。

「ずいぶん長続きますわね。その修行」

「！？お嬢様？」

「なんですの荷物持ち？その驚き様は」

「いえ、少し驚いてしまつて。お嬢様が俺に声をかけてくれるなんて。何か従者としての不手際でもありましたか？」

「そんなものはないですね。ですが、少しその武器に興味があつて。それはあんたの魔武器？」

「はい。そうです。俺の魔武器です。銘は気仙花といいます」

「気・・・仙花・・・」

「良かつたら、触つてみます？」

その瞬間嬉しそうな顔をしたアメリカがいた。

「良いんですの!？」

「はい。お嬢様の頼みですから」

「別に頼んでなんていません。なんか荷物持ちの癖に生意気ね」

「すみません。お気に障つたのなら謝罪します。それよりお嬢様。気仙花をお渡しします」

といって気仙花を渡す俺。

「美しい刀身の剣ですわね。ですがさっきまで光っていませんでした？」

「それは、俺が魔力と気力を込めて剣を振るっていたからです」

「お、落ちこぼれのアなたが・・・魔力と気力付加の魔武器を！？嘘ですわ・・・私でも魔力付加の剣しか出せないのに・・・」

「嘘はついていません。お嬢様」

お嬢様に嘘つきと思われたくはないな。こんなところで、不信任を持たれたくはない。実際に剣を振って見せるか？

「ならもう一回その気仙花とやらの剣舞を見せなさい」

いや、剣を振るのはいい。今、俺もそう切り出そうとしてたからな。だが、お嬢様の言葉の剣舞をもう一回見せなさいって俺は一度でもお嬢様に剣舞を見せたことがあったか？

「もう一回とはどういうことですか？お嬢様に剣を振る姿を見せるのは初めての筈ですが？」

少し失礼かもしれないが聞いてしまった。

その瞬間アメリアの顔が林檎の様に赤く染まり

「別にあんたの修行姿が気になって話しかけたわけじゃないんですからね！？」

と言われた。

「わ・・・わかりました」

妙な迫力に押されタジタジになるロイこと俺。

「じゃ早速剣舞を見せてもらいましょうか」

と、アメリア。

「わかりました」

まあ、断わる理由もないし、見せますか。大事なお嬢様の頼みだし。

「では振りますよ。お嬢様・・・いくぞ！気仙花！」

その呼びかけに応えるように気仙花は青白い光芒を浮かべながら美しくその刀身を揺らした。

「綺麗・・・」

アメリアはロイが剣舞をやめるまでその幻想的な光景を見続けた。

「ふう。これで信じていただけましたか？お嬢様？」

「フン。落ちこぼれの荷物持ちのロイにしてはまあまあな魔武器ね。まあ頑張れば？」

そう言ってアメリアは中庭を立ち去った。

ロイは初めてアメリアに名前と呼ばれたことに歓喜に打ち震えていた。

俺は守りたい人と少し心の距離が近づいた気がして、中庭を立ち去った。

一方、センターハート家アメリカの自室―

アメリカは自室のベッドで横になっていた。
そして一人の荷物持ちの少年を思い浮かべていた。

（あの荷物持ち・・・私クラスの魔武器を使っていた？私は学年トップクラスの实力はあると自負している。でも何だかあの荷物持ちの魔武器と私の魔武器じゃ荷物持ちの魔武器の方が美しく強いと感じてしまった。）

「はあ。なんで私あんな奴と会話したんだろう？」

ここ数年間荷物持ちとは従者としての会話しかしてこなかった。いやあの荷物持ちが拾われてからまともに喋ったことはない。

（あの美しい刀身に惹かれたのかしら？あの荷物持ちは落ちこぼれだけど剣舞は美しかった。まるで幻想空間にいるみたいな美しさ。まあ魔武器が凄いだけね。きっと。）

アメリカ自身は自覚していないが、アメリカはロイに少なからず興味を持ち始めていた。

第七話（後書き）

気仙花はかなり強い魔武器にしておきました。

第八話（前書き）

使い魔との契約の説明回です。お気に召さなかったらごめんなさい。

第八話

はぁ朝か・・・

俺は昨日、お嬢様と初めてまともに喋れた気がして少しテンションが上がっている。

早起きしてしまった。

まあテンションが上がっているといっても、落ちこぼれ扱いを受けている学園に進んで行きたいとは思わないが。

学園の制服も着たし、こちらの準備は終わった。後はお嬢様を待つばかり。

少し、待っているとお嬢様の部屋のドアが開くのが見えた。どうやら、お嬢様の準備も済んだ様だ。そう思っていたら早速お嬢様から声が掛かった。

「学園に行くわよ。荷物持ち。はい、鞆」

「はい。受け取りました。行きましようか」

「ええ、そうね」

今日は俺に対するお嬢様の物腰が柔らかい気がしないでもない。従者時代の俺はお嬢様と会話する機会もなかったから、お嬢様の事はあまり理解していないかもしれない。しかしそれを考慮してもいつもよりかなり良い感じだ。

昨日の魔武器が原因か？あんなのだったら、いくらでも見せてやりたいね。まあお嬢様には魔武器受けが良いらしい。嬉しい情報だ。折角、護衛権の従者になったのだから公私共にお支えしたいからな。

「なに突っ立ってんの！早く学園に行くわよ！あんたが来なきゃ私の荷物もないじゃない」

「すみません。少し考えごとをしていて・・・」

「そんなこといいから、早く学園に行くわよ。なんたって今日は使い魔との契約の日だからね」

「はい。行きましょう」

今日は使い魔召喚の日かあ。一日掛けてグラウンドで行われるんだよな。魔武器と同様に一生を過ごす相棒だ。今日は使い魔召喚を全力で頑張るか。

俺たちは学園に着いた。すると教室の黒板に太字でグラウンドに来るようにと書いてあった。

まあ向かうとするか。

グラウンドー

ここがセントラル魔法学園のグラウンドか。あまり見た事はなかったが、広いな。まあこの広さなら1学年全員の使い魔召喚なんて余裕で出来るな。

「1ーAはここだ！早く来い！」

と、リーゼ先生。

俺は急ぎ足で向かう。何故か俺とほぼ同時に学園に来た筈のお嬢様が既にグラウンドにいることに疑問を覚えたが、まあ些細なことだ。

「では、出席番号1番から使い魔との契約が始まる。使い魔との契約の魔法は先生達が行使するから安心してくれ」

どうやら、使い魔との契約が本格的に始まるな。使い魔は己の潜在能力に見合ったものが出てくるらしい。

もっといえは使い魔は自分の「将来」の可能性といっても過言ではないのだ。

嫌でも気合いが入る。といっても、俺が使い魔との契約の魔法を行使するわけではないので、なんか気合いが入りづらいが。

まあ全力で使い魔との契約に挑もう。それが、今、俺に出来る唯一のことだ。

第八話（後書き）

ロイ（主人公であり従者）の使い魔はもう決まっています。潜在能力の具現化とか書いてしまったのでかなり強くなるかもです・・・

第九話（前書き）

ロイの使い魔がまだでてこない・・・だと・・・

第九話

まずは出席番号1番つまりはアメリカお嬢様からの使い魔契約だ。
何が出てくるか楽しみだ。

「アメリカ君。使い魔契約を始めるがいいかい？」

リーゼ先生が問う。

「はい。始めてください」

お嬢様も心構えは出来ているようだ。

「ではいくぞ。サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使すると魔方陣が現れた。

「アメリカ君。現れた魔方陣に手をかざしなさい」

「わかっています。魔方陣に手をかざせば自分に見合った使い魔が
顕現するんですよね？」

「流石だなアメリカ君。その通りだ。私が説明を言う手間が省けたな」

流石お嬢様。使い魔契約は高等部の知識なのに、予習されていていらっしやるようだ。

「ではいきますわ」

そっいつて魔方陣に手をかざすお嬢様。魔方陣からでてきたのは・

・

「グオオ」

炎龍だった。炎のドラゴン。かなり大きい。凄い強そうだ。

「「「うおお！凄いアメリカさん！こんな大きい使い魔と契約できるなんて！」「」」

みんながお嬢様を褒め称える。

まあ、使い魔のランクは詳しく決まっていはいないんだが、炎龍はと

ても凄い使い魔の部類に入るんだろう。流石はお嬢様。

俺はお嬢様を盲信している。何か悪いか？

閑話休題させてもらおう。

午後になった。みんなが次々と使い魔との契約を終わらしている。ていうか、お嬢様の炎龍の時も思ったんだが、契約の時に我に力を示せるイベントはないんだな。つまり、使い魔に力を認めさせるイベント。そんなものがないから意外と使い魔契約はスムーズに進む。

まあ午前中にケイルが風龍を出してどや顔でこっちを見下していたのはかなり印象的だったな。まだ俺の使い魔も見えないのに。

まあ、ケイルの使い魔がドラゴン関係なのも意外だったが。ということは、ケイルもかなり強い部類に入るのか。

意外や意外。俺は今まで、ケイルをただの糞貴族だと思っていた。实力はあったみたいだ。

一時期はウザすぎて敬語をやめようかと思っていたくらいだった。何故敬語を使うのかって？おいおい、忘れたのか？俺はあくまでお

嬢様の従者なだけだから、貴族様達には敬語を使う必要があるんだぜ？

俺は誰に説明しているんだろうか？最近自分がよくわからない。

そんなことを思っていたら、何時の間にか俺の使い魔契約の順番がきたらしい。俺は名前がロイだからかなり順番が遅い筈なんだけだな。

時が経つのは早い。

「おい。出席番号34番。早く来い」

俺はリーゼ先生の元に向かう。

「ではサモン・リンクを行うぞ？ロイ君？」

「はい。お願いします」

「準備は出来ているようだな。では、サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使して魔方陣を顕現させる。俺は迷うことなく、その魔方陣に手をかざす。

ロイが手をかざした瞬間一つの禍々しい扉が魔方陣からロイの前に姿を現した。

第九話（後書き）

使い魔契約を引っ張りました。すみません。ストックの通りに出
て行くと、無理やりなタイミングで終わるんですね。本当に申し訳
ないです。

第十話（前書き）

使い魔登場です。

第十話

「何だこれは？」

俺は思わずそう呟いた。使い魔は確か生き物の形を形どっている筈だ。先生の魔法が失敗したわけでもないだろうし、一体目の前の現象は何なのだろう？

ただ、禍々しい扉が目の前に立っている。やっぱりよく分からない。でもなんだかあの扉の先から俺を呼んでいる声が聞こえる気がする。幻聴だろうか？錯覚だろうか？俺の心に直接語りかけてくるような感じ。まあよくわかんないが。

よく分からんが、俺は決心した。俺は先生に声をかける。

「リーゼ先生。俺はあの扉の先へ行きます」

「ああ・・・わかった・・・」

どうやらリーゼ先生や他の生徒たちは呆然としてまともにリアクションが出来ないらしい

。お嬢様ですら目を丸くしている。まあ、使い魔契約で変な扉が出

てくるなんて今までの生徒たちには居なかったしきつと珍しい事何だろう。いやリーゼ先生も驚いていたからもしかしたら俺が初めて扉を出したのかな？

前代未聞ってやつか？

落ちこぼれの特権みたいな感じだな。嫌な特権だが。

そして、俺は禍々しい扉を開けた。

扉の先―

俺は扉の中に入った。一面真っ黒な空間。こんなところに俺の使い魔がいるのだろうか？

「いるぞ。儂はここじゃ」

声の方を見ると、其処には金髪の美しい聖女とでも表現出来そうな女が立っていた。

「お前が俺の使い魔になってくれるのか？」

「うむ。なつてやるぞ。だがその前に、お主と話す必要があったからお主を僕の精神世界に逆召喚させてもらったのじゃ」

「話す必要があった？なら直接こっちにきて話せばよかったんじゃないのか？」

「残念ながらお主の今の魔力では僕を顕現させることはもって数十秒じゃ。なんせ僕は使い魔の中でも「例外」の存在じゃからの」

「そうなのか？だから逆召喚？をしたのか。まあ、それには納得した。そういえば、お前の名前も聞いていなかったな。ていうか、人型の使い魔なんて聞いたことないな」

「うむ。それでは、話したい事の前に僕の自己紹介からいこうかの？僕の名はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイじゃ。人型なのは僕が使い魔の中でも「例外」だからじゃの」

「例外？人型ってことか？まあ名前にも突っ込みたいがな」

「名前はしょうがなからう。生まれ持ったものじゃからの。まあお主の例外についての質問の答えは人型というのもそうじゃし、魔力量というのもそうじゃろっ」

「どういうことだ？」

「つまり、僕は他の使い魔と一線を画す使い魔ということじゃ。まあかなり強い魔力と気力と力がある使い魔と思ってもらって構わんぞ。えっへん」

えっへんって可愛いな。オイ。金髪の美しい美女に言われているから変な感じだ。まあ強い使い魔なのか？

「可愛いくて強いだなんて、褒めてくれるのか主様よ？嬉しい奴じゃ」

ん？口にしたつもりはなかったんだが・・・
喋っていたのか？俺。

「お主も人を褒めるなら口で言えば、いいものを・・・。安心せい。お主は喋ってはおらんぞ。ただ僕は主様の精神が繋がって主様の心が僕にただ漏れただけじゃ」

「マジで？」

「マジもマジ。大マジじゃの」

マジかよ・・・心読まれるとか拷問じゃね？

しかも意思があり喋れる使い魔に。さっきまでの強い使い魔としてのオプションがどうで

もよく感じるほどの事に俺は愕然としていた。

「なんじゃ。どうでもいいとは。僕はかなり強いんじゃないぞ。まあその僕を呼び出す事に成功したお前様もなかなかなものだと思うぞ」

「そうなのか？よくわからないが、そうだといいな。俺は強くなりたいからな。サタンが強い使い魔なら嬉しいし、頼りになるよ」

「主様は嬉しいことをピンポイントに突いて来るの。初めて名前呼びしてくれて嬉しいの。僕は主がとても気に入ったぞ」

女性？からの初めての好意だな。落ちこぼれだから学園では誰も話しかけてくれなかったし。

「ん？待て。主様は歴戦の英雄かなんかじゃないのか？学園の落ちこぼれ？主様が落ちこぼれだったら多分他の生徒達はゴミじゃの。ゴミ。僕が召喚されたのも久し振りだしそこまで力をもつ人間もあらんはずじゃしの。」

「ん？その歴戦の英雄ってのはどういう根拠からきたんだ？」

「うむ。ここから先は儂の話したいことと内容が被るじゃろ。先に話したいことの本題から話してもよいかの？」

「全然構わないぞ」

「もう。主様ったら本当に優しいのう」

なんだか俺、この使い魔にえらく気に入られてないか？

「さつきも言っただじゃろ。主様を気に入ったと。久し振りにしゃべれた相手じゃしの。儂が召喚されるなんて中々ないしの。久し振りに孤独とおさらばできるのだから、呼び出してくれた人を気に入るに決まっておろう」

「ついでにサタンは何年間孤独だったんだ？」

「ざっと千年位だと思うぞ？主様よ」

お前は千年もの間使い魔として誰の事を待っていたのか・・・

「お前は寂しくなかったのか？この暗闇の中にただ千年もいて」

「寂しいにきまって・・・寂しいに決まっておろう。誰もいない空間に一人でいるのはとても辛かった。主様がこなかったら、狂っていたかもしれんの。もし主様が来んかったら僕は・・・僕は・・・」

数千年の孤独を思い出していたのかサタンは泣いていた。俺は思わずサタンを抱きしめていた。

「サタン。大丈夫だ。俺はここにいる。これからは俺がお前の主だから。もう泣く必要は無いんだよサタン。俺はお前を孤独からも守れるように強くなるから。だから・・・だから・・・大丈夫だから」

「僕はもう孤独・・・じゃない？」

「ああ。孤独じゃない。これからは俺と共にいてくれ。お前が俺の使い魔だ」

「うん・・・うん。ありがとお。主様よ。思わず感極まって泣いてしまった・・・の。主様が良かったらもう少しこのまま抱きしめていてはくれんかの？主様の温もりは何だか安心するからの」

「サタンが嫌じゃ無ければいくらでも抱きしめていてくれてもかま

わない」

そうして落ちこぼれの生徒と孤独だった使い魔は互いの傷を舐め合う様にしばらく抱き合っていた。

「うむ。あ、ありがとうの。主様よ。慰めてくれて。とっても嬉しかったぞ」

「ああ。あんな月並みな言葉でもサタンの心に届いたなら嬉しいよ」

「ぬ、主はあれじゃな。本当に儂にとってピンポイントに欲しい言葉をかけてくれるの」

「そ、そうか。まあ仲良く出来そうで良かったよ。サタンとはこれから心まで見透かされてしまう仲だしな。これからもよろしくな。サタン」

「うむ。こちらこそよろしく頼むぞ。私の主様よ」

俺たちはお互い少し照れながらも絆を深めた。

「で、主様には話したいことがあるのじゃ。儂が主様のことでとても気になったことをな」

さっきまでとは違い凜として高圧的にもどったサタン。

「ああ、さっきの俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「そうじゃ。そのことで主様に質問がある。伝えたいこともあるの」

「わかった。質問してくれ」

俺はサタンの質問に身構えた。

第十話（後書き）

使い魔は戦闘でも重要になってきます。使い魔が気に入らなかったら申し訳ないです。

第十一話（前書き）

メインキャラですよ？サタンは。いいですよ？

第十一話

「では主様よ・・・主様は15才くらいの少年に見えるのじゃが・・・実は何百年かの歳を経ているのかの？」

これがサタンからの質問だった。

「俺は見た目通り15才の少年、ロイだ。だいたい人間はサタンみたいにそんなに永くは生きられないだろう」

「いや、人間でも寿命を延ばす例外はあるのじゃが・・・」

「まあ、そんな寿命関係の事はいまは別にいい。何故俺が何百年の歳を経ていると思ったのかを聞きたい」

「それは主様の気力が人間ではあり得ない量をもっているからじゃよ。気に乱れもなかったし・・・学生って事も真実なのじゃろう。

しかし、本当に驚いたわい。学生で儂以上の気力をもっている人間がいるなんて。やはり

主様も儂と同じいや、それ以上に例外的な存在なのかもしれないの」

「今更ながら思ったんだがサタンって何者だ？最初はちょっと大きい妖精なんかかと思っていたんだが・・・氣力を計れるましてや喋る使い魔なんて聞いたこともない。本当に何者なんだ？」

「僕はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイ。悪魔と聖なるものの名を持つ例外な使い魔じゃ。そのくらいしか自分を語る言葉がないのう」

「そうか・・・よくわからないが心強そうな使い魔で良かったよ。サタンが何者でも関係ない。俺の使い魔ってことで十分だしな」

「ありがとう、主様よ」

そういつてサタンは俺に微笑んだ。

「で、質問は終わったんだよな？サタン？確か質問の他に伝えたいことがあつたんだつたよな？」

「うむ。主様よ。伝えたいことは僕の現実世界での顕現についてじや」

「つまり、お前の召喚についてだな。何か条件でもあるのか？」

「条件とは少し違うのじゃが・・・実は僕は使い魔の中でも召喚するのに、莫大な魔力が必要なんじゃ。つまり、僕が主様に言いたいことは、僕が現実世界

にいる時はこの姿では

なく、力を抑えた姿ではないと、今の主様の魔力量じゃ難しいんじゃないよ」

「つまり、力を抑えた姿じゃないと俺はサタンを召喚出来ない訳か。具体的にはどんな姿になるんだ？」

そういえば使い魔召喚中は魔力と気力を消費し続けるんだよな。まあ、お嬢様の炎龍みたいな使い魔が常に側にいたら俺だって嫌だしな。あれ大きいし。

「黒猫じゃ」

え？猫ですか？サタン様？大きいのは嫌とは思ってたが、小さすぎなのではないですか？

「すまんのう。魔法を極めた僕でも変化出来るのは、黒猫だけなのじゃよ。まあ主様に魔

力を渡したり、魔法を教えたり、念話でいつでも会話出来るから使い魔としては十分じゃ

る？何か猫としての姿に不満があるのかの？
そうか！分かったぞ！儂のこの美しい女性としての本体の姿が名残惜しいんじゃない！」

ちげえよ。サタン。違うんだよ。

「違うのかのう・・・」

口には出していないが心が繋がっているから
俺のソウルボイスがサタンに聞こえてしまっていた。

「じゃ、何が不満なのじゃ？」

いや、人型の使い魔なら前代未聞だろうし、なんか扉がでたことも
なんとか収拾出来るかなって思っていたんだよ。しかし、蓋を開けて
みて実際に出てきた俺の使い魔が猫だったら・・・

「うむ・・・主様は学園では落ちこぼれ扱いだったかの？だとすれば
じゃ・・・」

落ちこぼれの名声に拍車がかかるってことさ！

「う・・・うむ。ごめんなさいなのじゃ」

「まあ、仕方ない事か・・・」

小さくてもサタンには妖精にでも変化して欲しかった。俺の魔力が
少ないせいとはいえ・・・後の事を考えると辛い。泣きそうだ。お
嬢様から呆れられるかも。

タランテイルスっていう世界は完全に実力主義だからなあ。猫って
使い魔としての成績はどうなるのかな？気になるところだ。逆に前
代未聞だろうしな。

笑い噺にもならない・・・

「まあ元気を出すのじゃ主様！本当の俺は最強の使い魔じゃぞ！」

「わかったよ。サタン。気遣いありがとな」

サタンが使い魔で良かった。心を見られるなんて最初はどんな拷問
かとも思っていたが・

・案外気楽にやれるかもしれない。敬語を使う必要もない初めての相手だしな。本当にお前と巡り会えて良かったよ。サタン。

「儂もじゃぞ。主様」

「んじゃお別れムードにもなってきたし現実世界にもどるか」

「そうじゃの。儂も猫になるとするかの。後
、言っておくが猫となった儂は念話でしか喋れんぞ」

「わかった」

「しばらく。この姿ではお別れじゃな。主様
。また会おうの」

「ああ。またな」

俺たちは離れ離れになるわけでもないのに、お別れをいつていた。次にあの金髪の美しい女に会えるのはいつになることやら・・・

そうしてサタンが光に包まれ、その後には一匹の美しい毛並みの黒猫がいた。

（この姿では初めてじゃの主様。改めてよろしくの）

これが念話か・・・どう返事すればいいんだ？

（心のなかで儂に話したいことを思い浮かべれば良いんじゃないよ。今みたいのに）

なるほどな。わかった。

じゃあここにもう用はないな。

（うむ。そうじゃの）

そうして俺たちはサタンがだした禍々しい扉から現実世界に戻るこ
とになった。

第十一話（後書き）

サタンは強すぎるので条件を作りました。ダメですか？

第十二話（前書き）

模擬戦、ケイルフラグ回。

第十二話

学園―

俺はサタンに逆召喚なるものをされた世界から元の学園へともどっていた。

美しい黒猫となったサタンを連れて。

扉の外を見るとクラスメイト達の使い魔召喚はもう全員終わっているようだった。

俺の名前はロイだから、出席番号は後の方だし、サタンの精神世界？に数十分くらい居たから当然みんなの使い魔契約は終わってるか。

だからこそ、扉から出てきた俺たちは注目されていた。

まあ、実質最後になっちゃったしな。使い魔契約。

クラスメイトのみんなが、こちらを信じられないものを見るような目つきで見ているのがとても印象的だ。

きつと俺の使い魔が猫だからだよなあ・・・

そう思ってるなか一人の貴族の少年が俺たちに向かって口火をきつた。ケイルだ。

「あの落ちこぼれの使い魔見てみろよ。みんな。猫だぜ？しかもその辺に居る様な猫だ。使い魔にしては、心もとないとは思わないか？」

その声でクラスメイトのみんなにどつと笑いが起こる。

「やっぱりロイの奴って落ちこぼれだな」

「使い魔と契約出来ないからって野良猫でも拾ってきたんじゃないかねえの？」

ケイルを始めとして、そんな声がチラホラと聞こえてくる。とても屈辱的だ。お嬢様と数人のクラスメイトが笑っていないだけまし

か。
(ムカつくのう。こいつ等。焼き殺してしまおうかのぉ)

サタンも切れかけていた。

そんな中リーゼ先生の声が掛かる。

「ほら、お前たち！ 静かにしろ！ 今から伝達事項がある！ 予定表を見ているやつは知っているかもしれないが、明日は模擬戦だ。ルールは今のお前たちの全力で闘うことだ。ダメージが規定量を越えようと、即闘技場から離脱させる魔法をかけてやるから全力で闘ってくれ。もちろん、模擬戦は実技点に入るぞ。もし、負けても成績は入るからそこは安心してくれ。あと、正面玄関に対戦表を貼っておいた。見ておいてくれ。では、今日は解散とする！ 各々体を休めておく様に！ まあ、使い魔との戦闘訓練ぐらいはしておいた方がいいかもな」

リーゼ先生がそういうと、みんなは俺の事など忘れた様に神妙な顔になった。そして、みんな使い魔を消し、教室に戻り帰り支度を始めた。

無論、俺もだ。サタンを心の中にしまいこみ我先へと正面玄関に向かう。早く明日の対戦

相手が誰か知りたいしな。お嬢様も向かった様だしな。

（主様はお嬢様とやらを随分と気にするのう）

そうサタンから心の中でツッコミが入る。

まあ、シカトだ。今は対戦相手が誰か知りたい。そうして正面玄関に着き俺は対戦表を見る。俺の対戦相手は―

何かと俺を馬鹿にするケイルだった。

俺はその時心から喜んだ。

（何故喜ぶのじゃ？あやつは学園でも中々の実力なんじゃろ？さつき儂もあやつ風龍を見たが、中々じゃったしの）

ん？何故かって？サタン？それはな……

（うむ……）

お嬢様が相手じゃないからだよ！ふう良かった。例え模擬戦でも俺はお嬢様に指一本傷つけられないだろう。そしたら完封負けだしな。

（お嬢様とやらが随分と大切なようじゃの。主様は）

まあな。それにしてもサタンの念話から不機嫌オーラが漂っているのは、何故だ？

（自分で考えてみたらどうじゃ。主様よ）

教えてくれる気は無いみたいだ。まあ、いいか。それより明日の模擬戦か。ケイルは学園の１年ではトップクラスだし、俺の力が及ぶかは分からない。でも、足掻いてはみるか。今まで学園に通っていない俺ではどの程度太刀打ちできるかは不安ではあるが。

（主様なら大丈夫だと思うぞ。なんせ儂を呼び出したお人だからの）

その自信は何処から来るんだよ・・・

（さあ。知らん）

そうですか・・・

まあ、いい。もう今日は屋敷に帰るか。お嬢様も一人で帰ってしまった様だし。

そうして、俺は明日の模擬戦に備えるために屋敷へ帰る事にした。

第十二話（後書き）

模擬戦はロイがやらかします。

第十三話（前書き）

サタンのポテンシャルがやばいです。

第十三話

俺はセンターハート家の中庭で明日の模擬戦の為に修行していた。

今はもう薄暗い夜。少し寒い気もするが、修行をしていると、体を動かして暖をとれるので、あまり気にならない。

明日の模擬戦は使い魔アリ、魔武器アリ、魔法アリ、剣術アリ、その他戦闘に関することなんなんでもアリの勝負だ。

俺は魔力量の関係でサタンを呼び出すことはできないが（黒猫のサタンなら出せるがあまり役には立たないらしい）ケイルは使い魔の風龍を出せるので、明日の模擬戦はかなりヤバイかもしれない。だが、対策はある。

サタンはというより使い魔の全ては主人が呼び出していない時は主人の心の中で主人が使役してくれるのを待っているらしい。

サタン（黒猫サタン）は俺の心の中にいる時に真価を発揮する。

その真価が俺の切り札だ。対策でもある。その真価とは・・・サタンに膨大な魔力を貸して貰うことだ。サタンと俺は心と心が繋がっている。まあ、他の主人と使い魔もそうなんだが。

その心の繋がりを利用して、そこから魔力を貸して貰う事ができる。

膨大な魔力量を持つサタンの主人となれた俺にしか出来ない荒技だ。

サタンを召喚する事は出来ないが、この方法なら風龍にも立ち向かえると思う。

ついでにこの魔力の貸し借りを思いついたのはサタンだ。戦闘では役には立たないからこの方法を提案したらしい。

だから、俺は魔力の受け渡しの練習をしていた。

「サタン頼む！」

（うむ。では主様に魔力の一部を）

その瞬間俺に青い魔力のオーラが纏わりつく。

凄まじい力を感じる。これでサタンの魔力の一部なのだから、サタンは凄い使い魔だと思い知らされる。体が軽いし、今この溢れる魔力なら俺が修行して覚えた、初級魔法なんて無限に唱えられる気がする。

凄い切り札を考えてくれたよ。サタン。

（うむ そうじゃろ そうじゃろ）

ああ、ただな・・・

これめちゃくちゃ疲れる・・・サタンとの心の繋がりを利用した荒技だしな。他人の魔力が無理やり流れてきてる気もするし、何よりこの膨大な魔力を受け止めて自分の力に変換しなければならないのが一番大変だ。

これは、本当に切り札の様だ。もうスタミナが切れる。これでは、今日はもう修行は無理か・・・

まだまだ修行が足りないな・・・

（うむ。まあ荒技だし仕方ないじゃろ。今日はもうゆっくり休むとよい）

そういつて俺に魔力の供給を辞めるサタン。

その瞬間俺に纏われていた青い魔力のオーラが消える。

サタンの言つとおり今日は休むか。まだ修行が足りない気もするが・

（明日は模擬戦なのじゃろ？なら、体を休めるのも修行の内じゃよ。主様よ）

ああ。そうだな。

それにしても俺の力でケイルに勝てるのか分からない。まあ、俺には切り札が二つある。

「不可視の斬撃」と魔力の貸し借りだ。それに俺の気力はサタン曰く、規格外らしいし、いざとなつたらその気力を気仙花に載せて斬撃を放つ方法もある。

まあ、負けるにしても少なくとも足掻けるだろう。

本音を言えば、センターハート家の従者として負けたくないが。

そんな事を思いロイは自室に戻り、睡眠をとった。

一方アメリカは―

アメリカはただ自室で心の中にいる炎龍と心を通わせていた。

まあ、アメリカの实力は学園の1年ではトップクラスなので、ロイみたいに修行する必要はないが。

「まあ、炎龍は喋れませんし、こんなところですね」

そう言い炎龍との心のリンクを切るアメリカ。

リンクを切った瞬間凄まじい力を中庭から感じた。

何ですの・・・この力は・・・

まるで金縛りにあつたみたいに動けませんわ。中庭を確認したいが、出来そうもありませんね。中庭といえば、あの荷物持ちも修行しているし、どうなっていますの？

まさか侵入者―父様も仕事でいないし、このタイミングを狙われたのかしら―

そんな思考がアメリアの脳裏をかすめる。しかし、それは杞憂に終わる。

直ぐに凄まじい力が消え失せたからだ。急いで自室の窓からアメリアは中庭を確認する。

そこにはただ疲れ果てたロイが居るだけだった。

（あの荷物持ちだけしか居ない？まさかあの荷物持ちがさっきの力を？そんな事はありませんわ・・・しかし、あの魔武器のポテンシャルは侮れなかったし・・・いやでも、使い魔は猫だったし・・・しかし、侵入者でも無さそうだし・・・あぁっもう分かりませんわ！）

様々な思考が浮かぶアメリア。

（考えてみればあの荷物持ちはよく分かりませんわ・・・魔武器は一級品ですが、使い魔は多分最底辺。リーゼ先生もあの荷物持ちの

事を疑わしそうな瞳で見ているしゃいましたし・・・結局、あの荷物持ちはよく分かりません)

(だけど・・・あの力は一体・・・)

ロイや謎の力を気にしながらも、眠りに耽るアメリカだった。

第十三話（後書き）

模擬戦でストックが切れます・・・不安です。

第十四話（前書き）

短めです。

第十四話

今日は模擬戦か・・・学校へ向かうとするか。

今日は闘技場で模擬戦なので、何時もより早く登校しなければならない。

屋敷の玄関を見てみると、もう学園へ向かう準備が出来ているお嬢様が立っていた。

「荷物持ち早く登校しますわよ」

「遅れてすみません。行きましょう」

いつもの様にお嬢様の鞆を持つ。今日は授業がないから鞆が軽い。この鞆の軽さが俺に模擬戦を意識させる。

少し緊張しているな・・・俺。

登校途中、後ろからお嬢様の姿を見る。まるで太陽の様に美しいと俺は思う。

お嬢様のような実力者は緊張も無いのだろうか？なら羨ましいかもな。

（主様よ。一つ進言しておくのじゃ）

なんだサタン？

（緊張とは大事なもののじゃ。緊張していないものは少しの油断で死ぬ事もあるじゃろう。儂の持論じゃが、常に緊張している者が真の強者としての形だと思ふのじゃ。だから主様。その緊張は忘れない方が良くとおもうの）

ありがとうサタン。要は油断した者が負けるってことか。とても参考になったよ。

（うむ。儂は長く時を生きてきたからの。無駄なうんちくなど数千はあるから、礼など構わんぞ主様よ）

それでもありがとう。サタン。お前のおかげで、緊張がなくなってきたよ。

（それは、良かったのじゃ）

念話でそんな話をしつつ、俺は学園に向かった。そして、学園に着いた。

荷物をお嬢様に預けて、俺は学園の闘技場へ向かう。お嬢様も御友達と合流して闘技場へ行く様だ。

俺は闘技場の扉前に立つ。とても重々しい扉に手をかけて、いよいよ闘技場の中へと入る。

もう緊張はあまりない。しかし、ある程度緊張感を残しておく。

戦闘前の心境には良い感じだと思う。

俺は妙に落ち着いた心境でケイルとの模擬戦を待っていた。

第十四話（後書き）

もつすぐケイルとの模擬戦です。

第十五話（前書き）

ケイル戦です。

第十五話

お嬢様の模擬戦は語るまでも無く、お嬢様の勝利だった。対戦相手も不憫だ。

なんせ、中級魔法を連発されたのだから。高等部レベルだと中級魔法はまだ、数回くらいしか打てないはずなんだけど・・・

マジでお嬢様凄い！

と思う。鼻肩目無しに。

あれだけのレベルになるまで相当苦勞なさった筈だ。もしかしたら、もう上級魔法すら行使できてしまうかもな。お嬢様なら。

そんな事を思わせる試合内容だった。

闘技場の中から規定量のダメージを超えて、医務室へ転移される奴や降参する奴や勝って素直に喜ぶ奴。

多種多様だ。

だいたいの模擬戦は魔武器での初級魔法の撃ち合いや使い魔召喚での使い魔の使役が戦闘の中身の様だ。

こう他人の模擬戦を見てみると、今の俺でも初級魔法くらいは十全に行使できているから俺って落ちこぼれじゃなくね？

今まで学園へ行ってなかったからといって、落ちこぼれ扱いというのは早計だと思う。

初級魔法でも行使して取り敢えずは普通にみんなに認めてもらいたい。

まあ、ケイルとの模擬戦は全力を出す。

落ちこぼれの名誉挽回の為にもな。

もうすぐ、俺の模擬戦の番か。

とりとめの無いことを考えて時間を無駄にした・・・

さて、スタジアムに上がるかね。

（共に行くぞ。主様よ）

おう！サタン！

闘技場のスタジアムー

どうやら審判や審査員がスタジアムの周りを囲んでいる。

審判は担任のリーゼ先生だった。

リーゼ先生に規定量のダメージを越えたら医務室へ転移される魔法をかけられる。

横にいるケイルにもだ。

いよいよ、試合開始ってやつか。争いごとはあまり好きじゃないが・

本気でいく！

「では両者所定の位置へ」

リーゼ先生から声がかかる。

俺はスタジアムの所定の位置へ立ち、向かいのケイルへ視線を向ける。

「落ちこぼれが相手のようだなあ。ワンサイドゲームにはしないでくれよ？」

「ケイル様。こちらも今は学生です。だから、貴族の貴方でも本気で行かせていただきます！」

「ほお。言っじゃねえか。なら落ちこぼれの本気とやら貰おうか！」

「ではロイ対ケイル。模擬戦を行う。始め！」

リーゼ先生の始まりの合図で俺とケイルの模擬戦が始まった。

「じゃあセンターハートの従者さんよお。こっちから行かせて貰うぜ」

そういつてケイルは魔法の行使に入る。しかし、俺もケイルに魔法を行使させまいと距離を詰める。

ケイルの魔力の感じからして、放たれるのは初級魔法だ。しかし、直撃はヤバイ。急いで間合いに入る。だが・・・

「少し遅かったなあ。落ちこぼれ。魔力の充填が終わっちゃった。これで試合終了かもな？いくぜウインド・カッター！」

ほぼゼロ距離でこの風の小刃は避けられないか・・・

ならこちらのカードを一つ切らせてもらう！

その瞬間ケイルの疾風でスタジアムに砂煙が舞う。

「もう終わりかぁ？落ちこぼれ。まあ、俺の得意な風の魔法をくらったんだ。落ちこぼれには耐えられないよなあ」

ケイルは笑う。

「何をおっしゃっているのですか？ケイル様？俺は無傷ですよ？」

「何！」

ケイルは魔力の残滓がまだ残っている俺の方を見る。

「そうか・・・分かったぜえ。少し驚いたが、その魔武器だな？」

「そうですよ」

そういつて俺はケイルに魔武器を見せる。美しき剣、気仙花だ。俺が無傷だったのも気仙花をだして気力を込めた斬撃でケイルの疾風から逃れたからだ。

「俺の風を凌いだんだ。それなりの魔武器のようだなあ。落ちこぼれにしてはよくやったと思うぜえ。こっちも魔武器を見せてやるよ」

そういつてケイルが見せたのは銀の杖。

「この杖の名は風翔^{ふうしょう}。こいつで魔法を行使すると風の魔法の力が上がるんだ」

「俺に魔武器の能力を教えるなんて余裕ですね？ケイル様？」

「フン。落ちこぼれの癖に俺の魔法に耐えた褒美とでも思っておけよ？話し合いはここまでだ。第二ラウンドと行くぜえ！」

そういつてケイルは魔法を行使する。

「ウインド・カッター！」

くそっ！さっきよりも風が速いし、威力も高い。

（落ち着くのじゃ。主様よ。儂がある。魔法に対しては千人力じゃぞ）

そうか。サタンがいたな。助かるよ。

（今から主様にあの魔法の弱点の場所を教える。そこにむかって主様も初級魔法を行使してくれんかの？）

わかった！

俺はウィンド・カッターに向けて初級魔法を行使する。

「ファイヤ・アロー」

よし出来た！ラザイン様との修行の賜物だ！

俺はサタンに言われた通りにウィンド・カッターに向けてファイヤ・アローを放つ。

「おいおい。落ちこぼれ君。そんなチャチな魔法で魔武器で強化された俺の魔法を貫けると思ってんのか？」

「あと少しで分かりますよ」

ファイヤ・アローとウィンド・カッターが風と火花を散らしてぶつかり合う。だが、僅かにロイのファイヤ・アローがケイルの魔法を押し始める。

「はあ？なんでだ？俺の魔法がただの初級魔法に負けているだ！
どいう手品を使った？」

「別に俺の魔武器の能力ではないですよ？ただ俺は魔法を放つ時に工夫したんです」

「工夫だと？」

「貴方の魔法の弱点部位を狙ったんですよ」

「あの短時間でそんな事できる訳がねえだろ！」

「出来たからここに立っているんですよ」

「ああ・・・分かった。まあ、俺の攻撃を貫抜いたのは事実だしな。少しは認めてやるぜ。お前は中々倒しがいがあるそうだ！」

そういつて、風の魔法を連発いや、乱発し始めるケイル。初級魔法のようだ。

「これならどうだ？落ちこぼれ？この早さの魔法はさすがにさばききれねえだろ？」

確かに今からじゃ魔法を行使しても間に合わない。かなり早い速度でケイルの魔法が向かって来る。

この状況を打破するには・・・今の俺ではあれしか思いつかない。

（ほう。出すのかの？切り札の一つを）

ああ・・・それしかないだろ！

俺は気仙花に気力と魔力を込める。そして放つのは・・・

「不可視の斬撃！」

俺は切り札の遠隔攻撃を出した。特別準備室の壁を簡単に突き破ったこれなら……

ケイルの魔法も一掃出来る筈だ！

視えない斬撃と風がぶつかり合う。

「おい。落ちこぼれ。何しやがった？視えねえ何かに俺の魔法が……ぐっ！！」

「馬鹿な……俺の風の魔法を全で一掃しただけで無く、俺にまで頬にかすり傷を与えとはな……本当に何しやがった！！」

「俺は貴方みたいに余裕じゃ無いんでね。種明かしする気は無いですよ！」

そういつて、すぐケイルの間合いに入る。

「敬語を使ってもばれてんだよ。おめえのその負けず嫌いなオーラ

はよお。良い加減その口調辞めたらどうだ？虫唾が走るんだよ！」

「そういう訳にはいきませんよ。ケイル様。センターハート家としてもダメです」

そんな事を言いながら、激しく剣舞をぶつけ合う俺たち。剣術は互角だが、ケイルの剣は咄嗟に出した練習用の剣。気仙花が相手では分が悪いようだ。

「剣術も中々やるじゃねえか？落ちこぼれ？」

「俺は武器に恵まれたようですね！」

そういつて俺はケイルの剣を弾き飛ばす。

「いいぜえ。認めてやる。お前は中々強い。学園の1年上位には入る強さだ。だから、少し手の内を出させてもらっぜ！」

今はケイルに認めてもらった嬉しさよりも、ケイルから溢れる魔力の方が気になっていた。

サタン・・・何がきそうだ？

（この魔力量では恐らく上級魔法は出せん筈じゃ。恐らく中級魔法を放つ気じゃろ。しかし、あの銀の杖が魔法の威力を引き上げるから威力は上級クラスの魔法かもしれんのう）

上級魔法並の中級魔法が飛んでくるって訳か・・・

俺は中級魔法使えないし・・・いや、使えないというより、中級魔法を試したことがない。

（なら試してみるかの？中級魔法の名を儂が教えるから行使してみるかの？）

いや、魔法って練習しないと使えまんって・・・慣れた魔法じゃないと使えないからそれじゃ賭けだろ？

（また、不可視の斬撃を使うのかの？確かにあれなら打ち勝つことは出来るじやろうが・・・魔力、気力ともに消費が激しいから得策ではないのう）

そうだよなあ・・・まだケイルは風龍も召喚してないからなあ。不

可視の斬撃は温存しておきたい。

なら・・・

中級魔法とやらに手を出してみるか！

初見だが。

（主様の才能を信じるのじゃ！）

俺はそう決意し目の前の魔力に立ち向かう。

第十六話

俺が今から試そうとしているのは、中級魔法のぶつけ合いだ。真っ向勝負だ。

これは賭けに近い。俺は中級魔法なんて唱えたこともないからな。まあ、初級魔法なら魔法名をいうだけで唱えられたが。

サタン頼む。俺に中級魔法の名を教えてくれ。俺はその魔法に賭ける。

（大丈夫じゃ。主様ならこの魔法を行使できる。いまから俺が主様に託す魔法は中級魔法と言われているなかでも俺が一番信頼していた魔法。それに、俺も主様の中から魔法のコントロールを手伝ってみるからう。賭けになんてせん。今から託す魔法の名は・・・

（ダーク・ナイト）

ダーク・ナイト・・・

わかった。俺もこの魔法を実現させてみせる。

協力頼むな。サタン。

（うむ。では、少しだけ儂から魔力を主様に渡すぞ）

「ぐっ！」

少し体が熱い。しかも焼けるように。

（これで魔法の成功率も上がるはずじゃ。体が少しきつい筈じゃが中庭の時ほどじゃなかるう？）

ああ・・・確かにあの時ほどの疲労感はない。

（うむ。疲労感はあるじやろうが我慢してくれの。ダーク・ナイトは中級魔法の中でもかなり魔力の消費量が多いからのう・・・）

ああ。わかってる。俺の為だ。我慢しよう。お前には本当に苦勞をかけるなサタン。

（お安い御用じゃ。儂は主様を全力で守るときめたからのう）

ありがとう。サタン・・・

じゃ行くぞ！

（うむ！）

「行くぜえ！落ちこぼれ！俺の中級魔法をくらえ！ウィンド・ストーム！」

ケイルが魔法を行使した瞬間凄まじい暴風がロイに襲いかかる。

これはヤバイな・・・人生で最大クラスの危機かもしれん。ダーク・ナイトとやらが成功しないと本当に不味いな。

俺はそう思いながら魔力を慎重に練る。

「どうしたあ？ビビったか？流石に中級魔法にまでは対応できないようだな？」

ケイルが何か言ってるが、無視だ。ただ魔力を慎重に練る。

そして、俺は唱える。俺の誇り高き使い魔が信頼していた魔法を。

成功するかはわからない。

暴発するかもしれない。

これは、賭けだ。

それでも、負けたくないから。強くなりたいから。こんな風くらい
跳ね除けるようになりたいから。

だから・・・

俺は唱える。闇の夜を名に持つ魔法を。

「ダーク・ナイト」

ロイがそう唱えた瞬間、圧倒的な暗闇が闘技場を支配した。

「なんだ？なんなんだあ？この魔法は？こんな広範囲に及ぶ魔法・・
・初級魔法には無い筈・・まさか中級魔法を行使したのか？お前が？」

「さあ？どうでしょうか？」

「フン。いけすかない野郎だな。まあいい、俺の魔法は負けないかな。お前のよく分からん魔法など吹き飛ばしてやるよ」

そう・・・よくわからない。魔法は発動している筈なのに、明確な効果が出ていない。

まあ、暗くなっただが。攻撃ではない。

その間にもケイルの暴風が近づいてくる。しかし、俺の魔法は何もしてくれそうにない。

まさか失敗した？俺ごときが中級魔法なんて

無理だったのか？

ここで負けるのか？俺は・・・

（安心せい。魔法は発動しておる。取り敢えずあの暴風は余裕で防げるのう。流石主様じや。中級魔法を一発で成功させるなんて本当に例外じゃ）

成功している・・・？

サタンこの魔法の効果は・・・何だ？

（直にわかるぞ。主様）

サタンと念話している間にもケイルの暴風がもうもう目の前に―

その瞬間、闇が揺れた。

「なんだあ？空間が揺れている？何をした・・・！」

ケイルは信じられないものを見たように俺を見る。

暴風が俺のほぼゼロ距離で闇に飲まれ消えかかっているからだ。

サタン・・・もういつかい聞く。この魔法はなんだ？

（この魔法は魔法を拒絶する魔法。行使者に魔法が当たった場合それを自動的に消す魔法。しかも、この魔法は特別での。行使した後もしばらくはそこに留まり続ける。しかも、

魔力を込めた分だけ防御できる値も変わる。最上級魔法すら防げる可能性をもった魔法じゃ。ま、持続性がある絶対魔法防御というところかの。力を全力で使える時の儂だったらほとんどの魔法をこの魔法で潰せるの）

すげえ。そんな魔法を俺は唱えたのか。感慨深い。

「俺の魔法が消えた・・・何故だ！くそ！だが、お前は隙だらけだ！落ちこぼれ！いくぞウインド・カッター！」

初級魔法。そんな魔法は今の俺には効かない。

予想通りケイルの風は闇の前に消え失せる。

「なぜだ？まだ効果が終わっていないねえのか？何なんだ？くそ！」

そういつて魔法を連発するケイル。

しかし、その全てが闇に消えてゆく。

本当に頼もしいなこの魔法は。

「はあはあ・・・わかった。今のお前には俺の魔法は通用しねえみたいだ。おめえの魔法は確かにすげえ。だが・・・」

ここは・・・俺が勝つぜ！」

そう言つてケイルは風龍を召喚する。

「これが、俺の奥の手・・・風龍召喚だ」

「確かに凄い風ですね・・・」

「まさかお前に風龍を召喚するとは思わなかったぜ。褒めてやる。だがこれが出た以上お前の負けだ」

「なら足掻かせて貰います。ケイル様」

「ぬかせ！」

俺とケイルの模擬戦が新たな展開を迎えた。

一方観客席では―

ケイルとロイの高レベルな模擬戦にアメリカは驚いていた。中でも一番驚いたのは・・・

このスタジアム一帯を暗黒に染めた魔法だ。

（あんな魔法・・・見たことも聞いたこともないですわ・・・やはり、あの荷物持ち。何か特別なのかしら・・・？）

ロイの闘いに困惑しているのは、観客席にいる全員だ。

先生達ですら、驚いていた。

なかでもロイが中級魔法を唱えた時にそれが一番強まった。

魔法はこの世界でのステータス。それも当然だ。

ロイは自分の評価が観客席でよくわからなくなっていることをまだ知らない。

第十七話（前書き）

模擬戦終了。ストックも終了かな？

第十七話

俺は風龍に向かい合っている。

なんて威圧感だ・・・

これが、ケイルの切り札か・・・

お互い使い魔には恵まれたな。

「ギャオー！！」

「なっ！」

風龍が吠えただけで凄まじい暴風が発生した。危うく、吹き飛ばされるどころだったが、ダーク・ナイトの防御のお陰で何事もなかった様に俺は立っている事が出来る。

どうやら、風龍の風も魔法に分類される様だ。今の風が魔法じゃ無かったら終わってたな。俺。

流石風龍って事か。

（臆するな。主様よ。主様はまだ気力も魔力も十二分に残っておる筈じゃ。主様ならあの風龍を超えられる筈じゃ。儂は信じておる）

お前にはいつも励まされるな。

（お互い様じゃろ？）

ああ・・・そうだな。俺等は一蓮托生だ。

（うむ。その通りじゃ。共にあの龍を越えようぞ！）

おう！

「風龍！お前のブレスをあいつにくらわせる！」

「ギャー！！！」

ケイルの命令で風龍がブレスの準備に入る。

使い魔契約から間もないのに、もう使い魔に命令出来るなんて、ケ

イルは凄いと思う。

俺なんて魔武器と使い魔が居なければタダの落ちこぼれだ。

素直に感心するよ。ケイルには。

きつと貴族として様々な努力をしてきたのだろう。

だが、俺も修行をしてきた。ケイルに負ける理由はない。努力の年月の違いはあるだろう。だが、負ける理由になっではないんだ！

俺は気仙花に気力と魔力を込める。多分、風龍のプレスを防げるのは不可視の斬撃だけだ。

俺の全てを賭けるつもりでこの技を放とう。
それが俺に出来る最善。

「いくぞ！風龍！プレスだ！」

「ギャーーーー！」

ケイルの命令と共に、放たれるブレス。ケイルのさっきの暴風よりも激しい風。きっとダーク・ナイトの防御では防げない。

俺もそれに対抗すべく、視えない斬撃を放つ。

「風龍のブレスが何かとぶつかり合っている？俺の初級魔法を全て打ち消した技か！」

その通りだ。ケイル。

後は、どちらの攻撃が打ち勝つか・・・

それに全てがかかっている。頼む・・・打ち勝ってくれ・・・

だが、俺の思いは虚しく風龍のブレスが視えない斬撃を通過し俺に迫る。

「ぐあああ！」

俺はみつともなく叫ぶ。ブレスが直撃してしまったからだ。不可視の斬撃でブレスの威力を弱くして、ダーク・ナイトの防御まで発動

しているのにこの威力か・・・

凄まじい痛みだ。ダーク・ナイトの防御が無ければ一瞬で医務室送りだったな。

俺はここで負けてしまうのか？

そんな思いが俺の胸をまたよぎる。

俺は負けないとあの日誓った筈なのに・・・

負けたくないんじゃないんだ・・・負けられないんだ・・・

俺は捨て子だ。きつと弱かったから捨てられたのだろう。推測にすぎないが。

俺は弱いという理由だけで人並みの幸せを失ってきた気がする。唯一の幸せはセンターハート家に拾われたことだった。

俺はいつも弱い。弱いから全てが俺の手から滑り落ちる。今の居場所だけはなんとしても守りたいというのに・・・

弱かったらまた・・・捨てられる・・・

また一人になる・・・それだけは嫌だ。嫌なんだ・・・

センターハート家の人は優しい。捨てられることは無いと思う。

だけど俺のせいで少しでもセンターハートの名に傷が付いたら・・・

この世界は弱いものにはどこまでも非情だ。弱いものは全て切り捨てられる。タランテイルスはそういう風に出て来ている。

だから、辛すぎる生活のせいで記憶を失った俺は誓った。

俺は強くなる・・・最強になる。もう、悲しむことがないように。弱い俺を支えてくれた人を守る為に・・・そして、一人にならない為に・・・

だから！

だから！

負けられないのに！俺はまだ立ち上げられるのに！

風龍には勝てないのか？俺は弱いままなのか？ずっと無力なままの子供なのか？

もう、嫌なんだ・・・

負けるのは・・・

落ちこぼれと言われ蔑まれるのはいい。だが・・・誰かに負けることだけは・・・

俺の魂が俺を許せない！

「サタン！！！！俺に・・・魔力を貸せええええええ！！」

（主様の思いは伝わった。儂が主様の全ての望みを叶えよう。荒技じゃが耐えてくれの・・・）

そして、俺に莫大な魔力が纏わり付く。

「なんだ・・・なんだよこの魔力は・・・俺の体が金縛りにあったみてえに動かねえ。何なんだよこの魔力は！」

ケイルは怯えている。風龍もその場から動けない。

「くそ！くそ！風龍！あいつにもう一度プレスだ！」

「ギャオー！！」

風龍がプレスを出す。

俺は莫大な魔力と度重なる疲労のせいで既に意識朦朧だ。

そんな俺が咄嗟に風龍のプレスに対抗しようとして出したのは・・・

「俺は負けられないから……だから……ファイヤ・アロー」

初級魔法だ。だが……サタンから借りた魔力の全てを込めた。

そのお陰で、火の矢は火のフェニックスに姿を変える。

フェニックスとブレスがぶつかり合う。数秒
拮抗したが、フェニックスがブレスを軽々突き破る。

火のフェニックスがケイルと風龍を包む。

「ぐわわ！」

「ギャオーー!!」

二つの叫び声が聞こえる。俺は勝ったのか？目の前にケイルはいない。医務室に送られたのか……？

ダメだ。意識が朦朧とする。俺が勝ったのかはよく分からない。

だが……もう限界だ。

くそ・・・くそ！

勝ったのか分からない内に気絶かよ・・・

ああもうダメだ。

最後にサタンが何か言っている気がしたが、俺は気絶した。

第十七話（後書き）

ロイの強くなりたい理由は単純に一人になりたくないという気持ち
が強いです。幼い頃の大きな悲しみが孤独感を生んでいます。

第十八話

ああ・・・よく寝た気がする。

俺は確かケイルと闘って・・・

どうなった？

（気絶したんじゃないよ。主様よ）

ああ・・・そうだったな。

俺は負けたのか・・・

（いや、主様は勝ったぞ。先生とやらや審査員やらが主様の勝利という形で模擬戦を終了させた様じゃ。まあ、当然じゃ。儂の魔力で丸焼きにしてやったからの）

俺が勝った・・・？丸焼き・・・？

やばいな。最後の方の試合内容が完全に頭から飛んでいる。

（それくらい疲労が溜まっておったのじゃろ。あの荒技も使ったしの。それに従者として・・・だったかの？そのストレスとかもあったじゃろうし。それにしてもあの時の主様は凄い気迫じゃったのう。先生とやらや生徒とやらが主様の魔力と氣力に気圧されておったぞ。いや、愉快じゃった）

そうなのか・・・？思い出せない・・・

まあ、勝ったのならいい。どんなに不恰好な勝利でも俺は受け入れよう。

でも、少し安心したよ。模擬戦という問題も終わったしな。

ゴタゴタはあんまり好きじゃないしな。

「ふわぁゝ。やばいな。また、眠くなってきた。どうやら、医務室に居るようだし寝ててもいいのかな？」

疑問形だが、俺は既に寝る態勢に入っている。

「あら。起きてたの？全身切り傷だらけだったのに、回復が早いわね」

・・・医務室の先生か？

「ああ、先生ですか。俺はもう帰れるんですか？」

寝たいとは思うが、もう日も暮れている。先生に許可を取るのが面倒だから、寝ようとしたが、先生がここにいるんだ。さつさと帰る許可を貰って屋敷に帰りたい。お嬢様も、もう帰ってしまっただろうし。

荷物もてなかったな・・・

荷物持ち失格だ・・・

センターハート家には迷惑ばかりかけているのに・・・

お嬢様の役にちつとも立ててない。

はあ・・・

とりあえず帰りたい。早く帰る許可をくれよ。名も知らない医務室

の女医よ。

「実はあなたの事を学園長が呼んでいるのよねえ。怪我人には安静にして、欲しいのだけど・・・学園長があなたが起き次第学園長室に連れてくるようにですって。だから、ごめんなさい。学園長室に行って頂戴」

学園長？俺が何かしたか？

（わからんのう。何で呼ばれたんじゃろ？）

サタンにも見当が付かないか。

学園長室か・・・何か面倒だ。

まあ行くか。今日の模擬戦の話かな？

分かんが。

学園長室ー

入った。学園長に入った。大理石の豪華そうなつくりだ。装飾もたくさんされている。

学園長は確か・・・初老の女性だったかな？

「貴方がロイ・カーレス君ですね？模擬戦は拝見させていただきました」

「ありがとうございます。で、話の内容とは何ですか？」

この人、俺が相手でも敬語なんだ・・・学園長なのに。まあリゼ先生もそんなもんか。

「話の内容はですね・・・模擬戦のことですよ」

ああ、やっぱりか。でも、何故だ？

「何かしてしまったのでしょうか？すいません。貴族の規則には疎いもので」

「いえいえ。そういう事ではないんですよ。貴方の模擬戦で無作法はなかったですよ。ただ・・・あの闇の魔法はなんですか？」

学園長から凄まじい量の魔力が俺に迫る。

「うっ！」

俺は吹き飛ばされた。

「私は永い時を生きてきました。魔法も最上級やあらゆるところまで知っています。ですが、あの魔法は何なのか？あれは私も知らない未知の魔法ですよ？ただの学生には行使できません。正直怪しすぎる。貴方の経歴もよく分かりませんし。場合によっては私が貴方を・・・それがギルドや軍に追放しないといけません。一体貴方は何者なのですか？」

おいおい。サタン。なんて魔法を教えるんだ。学園長も知らない魔法なんて・・・

（それはのう・・・ダーク・ナイトは僕のオリジナルだから。そのババアが知らないのも当然じゃ。それにしてもこのババアむかつく。主様に魔力を向けるなど・・・この恥知らずが！）

その瞬間。俺から凄まじい量の魔力が纏わり付いた。

おいおい。サタン。なにしてんの？勝手に魔力を渡さないでくれるか？

「な・・・やはりこの魔力の量・・・学生の範疇を超えている・・・もしかして総量は私の私以上か・・・？」

学園長が結構苦しそうだ。サタン、魔力の放出を辞めてくれ。

（何を言っておる。このババアに主様は殺されかけたのじゃ。これくらいは当然じゃ）

それは、俺という不特定不安分子から学園を守るためだろ。仕方ないと思うぞ。というか、このままじゃ話しあいにならないしな。真面目に魔力を止めてくれ。

（そこまでいうなら・・・仕方ないの。ただ、主様に危機が再び迫ったら、俺も考えがあるぞ）

わかったよ。サタン。

そして俺から青いオーラが消える。

「学園長。俺は学園に危害を及ぼすつもりはありません。どうか信じてください」

（主様よ。頭を下げる必要はなかるう？）

うるさい。サタン。この場面に俺の学園生活がかかっているんだ。センターハート家にも迷惑かけられないし。

「どうやら、攻撃の意味はないようですね。分かりました。私も魔力を解きましょう」

「ありがとうございます」

「では、再度問います。貴方は何者ですか？明確な答えをお願いします。ついでに、学生やセンターハート家の従者という答えは受け付けません。ただの学生や従者があんな魔力をもっている訳がないのですから」

俺が何者か？そんなの・・・俺が知りたいな。

俺は何者なんだ？

センターハート家の従者？

ロイ・カーレス？

いや、これらの要素は俺が俺である証明にはなっていない・・・

名前にいたっては、自分で付けたしな。

振り返ってみると笑えるな。15年も無駄に生きてきたのに俺という存在を証明するものがなにより一つ無いなんて。

本当に笑える。

本当に・・・笑える・・・

俺は・・・

まあ、俺は自分が何者かも分からない。なら解答は一つしかないな。

「俺が何者か？ですよ？残念ですが、分からないのです。記憶が無いもので」

「その解答では私は貴方をー」

「話しを続けさせてください。俺は一つだけ。本当に一つだけ。俺は信じているものがあります」

「信じているもの？ですか？」

「はい。それはセンターハート家です。俺はあの家だけは絶対に裏切らない。俺はあの家に救われましたから。この学園にはセンターハート家のお嬢様がおられます。私はセンターハート家の縁者が学園にいる限り学園に危害は及ぼしませんよ。だから・・・どうか・・・俺を信じてください」

彼は悲しそうにだけど強く私のことを見る。懇願するように。

・・・そんな目をされたら、信じるしかないじゃないですか。

「分かりました。貴方の事を信じましょう。先ほどまでの無礼を許

して下さい」

「ありがとうございます……」

「今日は長々とすみませんでしたね。ロイ君。今日はもう帰ったほうがよろしいでしょう」

「はい。分かりました。では。」

俺は学園長室から出る。

良かったよ。学園長と敵対しなくて。本当に良かった……

(うむ。そうじゃの)

ああ……

疲れた。

サタンの力の扱い方も考えないといけないのか？

ややこしいな。

とりあえずは帰るか。

そうして、俺は屋敷に向かう。

一方学園長は―

ロイ・カーレス君。深い悲しみをもっている少年。

「彼が学園に危害を加えるような人格ではないようですし、安心しました」

彼が学園に危害を加えないなら、私は彼を精一杯サポートしますか。
彼は平民ですし、いろいろ苦勞もあるでしょう。

誰かが、守なければ。それが教育者としての務めだ。

（いろいろ苦勞が待っているかもしれませんが、頑張ってくださいね。ロイ君。）

一人そんな事を思う学園長であつた。

第十九話（前書き）

学園長に殺されかけるとは・・・ロイに同情。彼って不幸ですね。

第十九話

俺は今屋敷にいる。従者としての雑務を終えいつも通り修行。

最強に近づけるのはとても嬉しい。そんな充実感があるから修行はやめられないな。

（その志しがあれば主様なら人類最強などすぐじゃろうな）

そんなことはないと思うんだが。サタンは人類舐めすぎだ。まあ、悪い気はしないがな。

（僕は人間を舐めてなどおらぬよ。ただの主様のような人を見ているとつい違和感を感じてしまうのじゃよ）

違和感？

（人間とはここまでの存在だったのかと。主様を見ていると主様以外の人間はゴミにしか見えんの。正直主様と他の人間ではそのくらいの差があるの。まあ、僕は人間じゃないから人間の価値観とは違うかもしれないがの）

俺を褒めているようだが、俺はそこまで素晴らしい人間じゃないぞ？

俺より性格がいいやつなんてたくさんいるし、強いやつもたくさんいる。

俺なんかまだまだだ。

（我が主様よ。そういうことではないのじゃよ。強さとか明るさとかそんなものでは僕は人を褒めん。評価にすら入れん）

じゃお前の人間の価値観はなんだ？気仙花で素振りをしながら尋ねる。

（意思の強さじゃよ。どんな困難でも立ち向かう勇氣。それが僕の人間評価の価値観じゃ）

俺は意思の強さが多いってことか？

（多いどころじゃないのう。僕はよりも上じゃ。おそらく世界最高の意思の強さじゃよ）

どう反応すればいいかわかんないな。まあ、俺の氣力が多いのもそ

ここに関係するのかな？

（恐らくそうじゃろう。最初は本当に驚いたの。こんな気力をもつ人が少年とは・・・みたいな感じで驚いたの）

サタン。褒めてくれるのは凄いいんだが、修行に集中するからしばらくは話しかけないでくれるか？

（うむ。分かったの）

俺はその日剣術を修行していた。様々な剣術がセンターハート家の指南書には書いてあったが、俺にはどうもしっくりこない。

自分だけの剣術を創ることも検討中だ。まだ型がない無骨な剣術だが何か掴めた気がする。

それだけでも収穫だな。

まあ、剣術に関してはおいおい考えるか。

（修行もひと段落ついたようじゃの。主様。唐突で悪いが、恐らく主様の方に向かってくる足音がする）

おお。サタンか。

足音？誰だ？使用人仲間か？いや、こんな時間に中庭に用はないはず・・・

じゃあ誰？

そうして俺は足音の主へと顔を向ける。

お嬢様だった。

俺に用でもあるのかな？あんまり家事を申し付けられないから嫌われているかと思っただが。

何かして欲しいことでもあるのかな？良かった。お嬢様に従者として見られてて。荷物しか持たせてくれなかったから、正直、落ち込んでた。

一応、従者としてはかなり完璧に育てあげられたからな。

ラザイン様に。

だから、お嬢様。

俺に何なりとご要望をお申し付けください。

（従者根性が染み付いておるの。さっきまでの美しい剣術が嘘みたいな心の変貌じゃ。流石主様じゃ）

褒めてるのか？けなしてるのか？

（褒めておるぞ！主様）

そうか・・・ありがとう・・・？

まあ、今はサタンの事はいい。お嬢様のご要望を聞かなければ。

いや、話しかけてくれるのを待つべきか。

何十年も待つてたんだ。待つことには慣れてる。

「あんたの今日の模擬戦について話があるの」

従者スキルがいらなそうな内容だ・・・

意気込んでいた自分が悲しい・・・

「模擬戦の事ですか？」

「ええ。そう。荷物持ち。あんたは本当に今まで学園に通ってなかったの？」

「はい。その通りです」

「なのにあんな空間を支配下に置く、ましてや火のフェニックスなんなぜ出せるの・・・？」

「学園には通って居ませんでした、今まで必死に修行して足掻いてましたから。そのおかげです」

本当はサタンのおかげなのだが、使い魔のおかげといっても、説得力がない。

なんたって俺の使い魔は黒猫なのだから。

本当は金髪の美しい悪魔のような聖女のような女なのだが。

「努力であるケイルを倒したというのかしら？」

「はい」

すまん。サタン。大嘘だ。

そしてお嬢様あなたに嘘をつくことをお許してください。

「なるほどね。私はあんたの「努力」を知ってるから、まだいいけど学園のみんなはあんたの模擬戦の結果を見て困惑してたわね」

「困惑ですか？」

「そう。困惑。落ちこぼれの貴方がケイルに勝利したから当然ね。まあ、悪い方向ではないけどいい方向でもないわね」

「なぜ俺にそんなことを？」

「ケイルを倒したご褒美かしら・・・？それにあんた面白いしね」

「気にかけてくれてありがとうございます」

「っ！！気にかけてはないわ。あんまり勘違いしないようにね。荷物持ち」

「はい！」

「なんで笑顔なの・・・」

「お嬢様と会話出来て嬉しいからですよ」

「そっそう・・・変な従者ね・・・」

「顔が赤いけど大丈夫ですか？お嬢様？」

「うるさい！大丈夫よ！」

「すみません。気に障ってしまったようで」

「はあ。別にもういいわよ。まあ、あたしからは以上よ」

「はい。分かりました」

「じゃあ、おやすみ。荷物持ち」

「いい夢を。お嬢様」

お嬢様は中庭を立ち去る。

それにしても模擬戦の反応が困惑か・・・学園長の例もあるしなんかこわいな・・・

（主様なら大丈夫じゃろ。なんだかんだいってあの少女も主様を嫌っていないようじゃしの）

そう信じたいな・・・

なんか今日は疲れた。

模擬戦に学園長にお嬢様。

もう限界だ。

疲労が。

修行も切り上げて今日は寝よう。

(うむ。それがよい)

一方アメリカは・・・

「あの荷物持ちの実力が未知数だわ・・・」

本当によく分からない従者だ。

「まあ、今日の模擬戦で結構役に立つのはわかったし、いい事よね」

いい事？なんで従者が強いのがいい事なの？

自分で自分が分からなくなる。

「あの荷物持ちは私に新しい景色をみせてくれるのかしら？」

少し荷物持ちに期待してしまう。

あのミステリアスな雰囲気。

「実力はみとめるわ。荷物持ち。まだ面とむかつては言わないけど・
・応援してる。あんたを」

努力で強くなった荷物持ち。もしかしたら彼と私は似てるのかもし
れない。

第十九話（後書き）

努力がアメリカに届く瞬間？でした

第二十話

模擬戦を終え、学園長との対談？を終えた翌日ーつまり今日。

俺は今、お嬢様の鞆を持ちながら通学途中様々な奴に奇異の視線を向けられていた。

昨日の模擬戦でケイルに勝ったからだろうか？俺はケイルに勝てた気はしてないが。

勝てたのは運が良かっただけだ。

なのに、この視線の数・・・

俺という人間を推し量ろうとでもしているのか？

好奇心溢れた貴族達だ。とても迷惑している。

それにこの視線は必然的に俺の近くを歩くお嬢様にも向かう。

お嬢様は何処吹く風というようにスルーしている。

お嬢様本当にすみません。

俺は昨日のお嬢様の忠告？通りなにか複雑な立場にいるようだ。

この俺への注目度からも分かる。

俺が目線に向けるところから視線を逸らす奴や逆に見返してくる奴。

反応は様々だ。

俺は学園長から殺されかけたことを思い出す。

きっとダーク・ナイトを使ったのもこの注目度の原因なんだろうなあ。

学園長も知らない魔法を落ちこぼれと言われていた俺が使ったから当然か。

きっと学園での俺への評価は、ケイルに勝ったよく分からない奴という所だろう。

いや、怪しい奴か？

今までもろくに学園に通っていなかったのに、魔法を使えるなんておかしいらしいからな。

しかもケイルに勝つために凄い魔力をサタンから貸して貰ったことは学園のみんなに見られたしな。

うーむ、この視線の意図がやっぱり分からない。

ただの好奇心か？迷惑だ・・・

お嬢様の忠告？の通り学園生活を送るにあたって注意が必要かもな。

あーあ、めんどくさい立場になった。学園長みたいな反応をしてくる奴がでてこないといいが・・・

祈るしかないな。

俺とお嬢様は教室に着いた。そしていつも通り授業を受ける。

授業の内容は簡単だ。初級魔法の理解を深めるだけだからな。

実技も剣術の研鑽のみ。まだ魔法についての実技はしていない。

実技中は目立たないようにこっそり剣を振っていた。

俺個人で剣術練習した方が上達するからな。

しばらくの間、慎重に学園生活を送った結果、ある事がわかった。

俺を落ちこぼれ扱いする奴が減ったこと。これは嬉しい。とてもな。

だが・・・クラスメイトのみんなが俺と一定の距離を保つようになった。

ある意味孤独だ・・・

たまにお嬢様が話しかけてくれるのがとても嬉しい。

どうやら俺は根暗な性格のくせに孤独が嫌いなどうしようもないガキらしい。

こんな距離を作られるなら、まだ落ちこぼれと言われ蔑まれていた方が良かったかもな。

どうやら、とりあえず俺の事はクラスのみんなとしては様子見、保留するらしい。

模擬戦で負けたケイルも同じような感じでクラスメイトに扱われている。

多分、貴族同士何か気まずいのだろう。

まあ、少し寂しい気もするが、俺の目的はあくまで強くなってセンターハートをあらゆるものから守ること。

その目的を邪魔されないのならこの立ち位置もいいのかもしれない。

俺の近況報告はこんな所だ。サタンどう思う？

（うーむ。なんか悲しいのう。主様はあんなに頑張ったというのに・
・儂も孤独は死ぬほど嫌いじゃからの・・これも強者としての
定めかのう。運命は儂らを孤独にさせたいのかの？）

案外俺らは、運命とやらの嫌われてるのかもな。

なんか不幸だし。

（儂らは似たもの同士ということじゃの・・・強いが故に迫害を受
ける・・・）

迫害？そんなに酷くはないさ。

（儂は孤独が何より嫌いじゃからの。儂にとっては孤独は迫害なの
じゃよ）

そうか・・・お前は・・・何千年も・・・あの暗い場所に・・・

（主様には、儂の様になって欲しくはないのう・・・）

サタンのように孤独にならないで欲しいってことか？

(うむ。そうじゃ・・・)

残念だったな。サタン。

(何がじゃ?)

俺はサタンに心配される程孤独じゃないんだよ。

ラザイン様やお嬢様。様々な人が俺を支えてくれているからな。

それに何よりお前がいる。

俺の心にお前がいる。

サタンやセンターハート家がいれば俺は孤独じゃないんだ。

だから、残念だったな。サタン。俺はもうすでに孤独じゃないんだ。

お前さえ居てくれれば・・・

大事な人達が居てくれれば・・・

俺はそれでいい。

だから、あんまり俺の心配はしなくても良かったりするんだぜ。サタン。

サタン？

（主様は儂をもう一人にしないか？）

契約したときにとくに誓ったよ。お前を孤独から守ると。

（主様だけは儂のそばにいつも一緒に居てくれるか？）

ああ。当たり前だ。

（ありがとう・・・主様・・・儂が・・・儂が・・・主様を励まそうとしたのに、これじゃ逆になってしまったの・・・）

ああ、サタンだからお前は俺を孤独から守ってくれよ？

（もちろんじゃ！）

俺はどうやら、意外と運命に好かれていたのかも知れない。

第二十一話（前書き）

物語の構想は私の頭の中で出来上がりました。あとは書くだけです。私の書く作品は暗くなりがちなので、直したいのですが・・・難しいです。

第二十一話

俺はいつも通り学園に向かう。お嬢様の荷物を持って。

「ほら、荷物持ちいきますわよ」

「分かりました」

最近はお嬢様は俺と簡単な会話くらいならしてくれるようになった。

同情だろうか？それでも嬉しい。

お嬢様と話す為の繋がりである荷物持ちという役職だけは手放したくないと思う俺だった。

いつも通りの朝。いつも通りの授業。

そんないつも通りの時間が割と平和に過ぎていった。

ただ今日のLHRに爆弾は投下された。

リーゼ先生の口から。

「来週はチーム対抗のサバイバル演習がある。みんな気を引き締めるように」

は？

サバイバル演習？

聞いてないですよ？

「サバイバル演習については、以前配ったプリントに明記してある。みんなサバイバル演習があったことまさか忘れてないよな？」

「「はい。大丈夫です」」

プリント・・・

知らないな・・・

それにチーム対抗・・・

サバイバル・・・

闘いになるのか？

むう。プリントがないから分からん。

それにチームはどうやって組むんだ？好きな奴と組めなんて言われたら困るな・・・

「チームはこの時間に発表する。なおチームの人数は5人。ひとクラス40人いるから8チーム出来る。サバイバル演習は一年全体で行うから他のクラスのチームと闘うかもしれない。チームの結束力が高めておいた方がいいかもしれないぞ」

「つまりチームが重要ということだ。ついでに、それぞれのクラスでサバイバル演習の成績がトップだったチームは学園対抗トーナメントにも出てもらう。一年生は5クラスあるから、5つのチームがトーナメントに出れるわけだ。成績にも関わるからしっかりな」

サバイバル演習、つまりは1年5クラスでのチーム単位の闘いって事か。詳しいルールはまだよくわからない。

でも、味方はチームだけの戦いになるのか・・・先生の言うとおりチームの結束が重要か・・・とことん俺に不向きだな。

模擬戦の数週間後にサバイバル演習とか闘いが好きな学園だなあ。

迷惑だ。

まあ、強くなれるきっかけになるかもしれない。

頑張るか。それ位しか俺にはできないから・・・

「ではチームを発表する・・・まずはキリユー君・・・」

リーゼ先生のよく通る声がチームの編成を発表する。

先生曰く模擬戦や普段の成績などで実力が均等になる様にチーム分けされているらしい。

5チーム程が発表された頃だろうか。

リーゼ先生から俺の名前が発表された。

「次のチームはまずロイ君！」

その瞬間教室の空気が微妙になる。

微妙としか表現できない。

俺と一緒にチームになるのは嫌なんだろうな。

距離を置かれたことだし、背中を任せる仲間が俺じゃ組んだやつらも微妙になるしかないだろうな。

さて、次の名前は誰かな・・・

「次はケイル君！」

よりによって・・・ケイル・・・

どうなることやら。まあ、あいつもみんなから距離を置かれているようだし、境遇は似ているかもな。

逆恨みされませんように。

次は？

「次はアメリカ君！」

よし！お嬢様が味方なら、思う存分やれる！
まあ、お嬢様は俺と組みたくないかもしれないが・・・

次は？誰だ？

「次はティナ君！」

ティナ・・・？ああ・・・あの女の子か。確か成績は中の中くらいか・・・うまくやれるか？仲間として。

ケイルとお嬢様はかなり強いがバランス取れてんのかな？このチーム。

1年トップクラスだぞ。

まあ、俺が気にすることはないか。

さて最後のチームメイトは誰かな？

「次はセリア君！これがお前らのチームだ。覚えておくように。ついでに次の時間はチーム同士の結束を高めるための交流の時間となっている。来週のサバイバル演習のためにも交流はしっかりさせておくように。ルールの確認なんかもいいかもしれないな。自己紹介とかも済ませておけよ？」

セリア・・・名前からして女子のようだ。無口な人だった気がする。クラスを中心のお嬢様ともあんまり喋ってないし・・・成績はよくわからない。

でもこれでチームは決まったな。俺達のチームは

俺

お嬢様

ケイル

ティナ

セリア

上から根暗、守るべき人、似た境遇の人、成績が普通の引っ込み思案の女、よくわからない無口の女ってどこか。

引っ込み思案と無口か・・・

このチーム割と平和になるかも・・・？

ケイルはどうなんだ・・・？

お嬢様は・・・？

次の時間のチームとの交流の時間で全てが決まるな。

チーム戦とはいえ、負けるわけにはいかない。

守りたい人のためにもな。

どんなチームになるかはわからないが、最善は尽くそう。

そう思いながらロイはLHRの終わりを告げるチャイムの音を聞いた。

第二十一話（後書き）

ご都合主義御免！

第二十二話（前書き）

主人公の敬語が難しい。間違いあつたら作者の力量不足です。このチームのまとまりのなさを書ければ後の展開に役立つのですが・・・上手く書けたかな？

第二十二話

そして時はチーム交流の時間。

チームごとに分かれ席に座る。

俺たちのチームは教室の窓側に陣取っていた。

気まずいオーラを撒き散らしながら。

サバイバル演習ではパートナーになるのにこんな雰囲気でもいいのか？

きつとそう思っているのは、俺だけじゃない筈。

しかし中々口火を切れない。

会話スキルに乏しい自分が嫌いになる。

従者としての言葉遣いにボロが出ても駄目だしな。

ここは会話スキルの高い人に期待かー

「では、まずは自己紹介からいきますわよ!」

お嬢様!流石!この雰囲気の中、口火を切るなんて。

尊敬します。

(軽い尊敬じゃの)

うるさい。サタン。

「私の名はアメリカ。センターハート家の者です。みなさんとは背中を支えあうチームになるのですからよろしくお願いします。特にケイルさん。貴方には期待します。学園では1年トップクラスに入る実力を持っているのですから」

「俺に対する嫌味かあ?センターハートさん?」

そう言っただけケイルはお嬢様を睨む。

「やめて下さい。ケイル様。お嬢様はただ貴方に期待しているだけ

です。他意はありません」

俺は立ち上がりケイルからお嬢様を守るような態勢を取る。

「チツ。お前は・・・俺に勝った奴なのに、なぜそんなに人に隷属する態度を取る？俺はお前に負けてから、お前を意外とかつてるんだぜ？貴族としてのプライドは崩れたが広い視野で物を見れるようになったからな。そういう意味ではお前に感謝さえしている。最初、チームとやらには興味がなかったんだがお前がいるなら話は別だ。お前の力みせてもらうぜ？」

ケイル・・・お前・・・

俺に期待・・・？

サタンがいなければ何もできない俺を？

お前の方がよっぽど強いというのに・・・

お嬢様を舐めているのは、マイナスだが、そう思われるのはとても光荣だ。

「ありがとうございます。ケイル様」

「ああ・・・楽しみにしてるぜロイ君よお？俺は強い奴にしか興味がねえからな。そういう意味ではセンターハート。お前にも期待してるんだぜ？」

「ええ・・・ありがとうございます。では自己紹介を続けましょうか。荷物持ち。頼むわよ！」

ケイルの言葉を受け流すお嬢様。ケイルが嫌いなのだろうか？

サバイバル演習でチームとなるには嫌な傾向だ。

おっと、俺の自己紹介か。

「ロイです。センターハート家の護衛権の従者です」

「それだけのの？荷物持ち？」

「すみません・・・」

会話スキルが無い物で・・・

（儂にはかなり主様の言葉が届いたがのう。主様は会話スキルがないのではない。□下手なだけじゃ）

一緒の意味じゃないのか？サタン。

（儂も会話スキルがないかもしれんの・・・）

そうか・・・悲しいな・・・

（うむ・・・）

「わかったわ。では其処のお二人にも自己紹介をお願いします」

お嬢様がなんとかチームの会話が途切れないように言葉を繋げる。

本当にすみません・・・

「ティナです。アメリカさんやケイル君と組めるなんて嬉しいです。よろしく願います」

「其処の従者に負けた俺への嫌味かあ？名前も覚える価値のない女？」

「貴方・・・！そんな言い方・・・！」

お嬢様がケイルを睨みつけるが、ティナは真逆の反応をした。

「すみません・・・」

ティナは謝る。ケイルより実力が下なので、同じ貴族といってもやはりケイルには強く言えないのだろう。

この世界の縮図をみているようだ・・・

醜い世界制度だ・・・

「フン。言い返すことも出来ないのか？其処の女。ロイヤセンターハートはやはり例外ってことか。残念だ。俺はお前に価値を見いだすことは出来なさそうだ」

「あんだ・・・いい加減に・・・！」

お嬢様が威圧感を出す。

俺もケイルの言い方にはかなりイラつときていた。

それに・・・ティナって女の子を見ると昔の自分を彷彿とさせるからな。

弱いから黙るしかない・・・俺に・・・

今も弱いままだがな。

だが・・・

立ち向かう勇氣くらいはある・・・！

「ケイル様。同じチームとしてそれはないのでは？」

「ハハツ。やっぱロイとセンターハートはおもしれえ。一年で俺に口答えできるのはお前たちくらいだ。お前達は本当におもしれえよ。また闘りたいなあ？そうだろ？センターハートとロイ？」

さっきから気づいて無かったがケイルからの俺への呼び方が落ちこぼれからロイに変わっていた。実力が認められたからか？

だが、今はケイルから放たれた殺気に注意だ。

俺とお嬢様も殺気をケイルにぶつける。

教室中がその殺気に注目していた。先生ですらだ。

そんな中。

「すみません！私の変な発売のせいでチームの輪を乱してしまって自己紹介を続けませんか？お願いします」

懇願するように言うティナ。

やはり俺に似ている・・・

ティナには頑張って強くなってもらいたい。

「チツ。興が削がれた。お前らとまた闘えとおもったのになあ。残念だあ。つまんねえから寝るか」

ケイルは寝てしまった・・・

チームの雰囲気壊すだけ壊して・・・

ただでさえ気まずいの・・・

「私。ケイル君だけは好きになれそうにないわ」

「同感です。お嬢様。彼は戦闘狂の気がありますね」

「ええ。そうね。私も彼に変な期待されてるの・・・迷惑だわ・・・」

「そうですね・・・」

本当に迷惑だ。

「じゃあ最後の貴方。自己紹介お願いします」

「・・・セリア・・・よろしく」

「それだけ・・・？ですの・・・？」

お嬢様が聞く。

無視されていた。

このチーム。

一瞬でも平和かなと期待した俺が馬鹿だった。

全員危うい爆弾を持ってそうだ・・・（俺含むお嬢様含まない）

はあ。先が思いやられる。

第二十二話（後書き）

サバイバル演習までが遠い・・・このチームでサバイバル演習を乗り切れるのかという所ですね。ケイルのティナの扱いが酷過ぎてテンションが下がってしまった。だがpvが何時の間にかかなり多くなっていたので全体的にはティナのことを差し引いてもテンションは上がってます。読んでくれたみなさん。ありがとうございます。

第二十三話（前書き）

50000pv突破したのでしょうか？見方がよくわからないのですが超えていたとしたら嬉しいですね。

第二十三話

危うげなチーム交流も終わり、お嬢様と俺は学園から帰る。

「荷物持ち。あんたとは同じチームですわね」

ああ、そうですね。本当に良かった。

「はい。そうでございます」

「あんたに聞きたいんだけどあのチームどう思う？」

俺らのチーム・・・

背中を守り合うチーム・・・

それにしては・・・

（全然だめじゃの。だめだめじゃ）

そうだな。サタン。俺も同感だ。まあ、それをわかっていたところ
でどうにもならないが。

「お嬢様やケイル様がいるので、並の相手には負けないチームです
が・・・団結力が皆無ですね。弱点を狙われたら案外あっけなく全
滅してしまうかもしれません。そんな評価ですかね」

俺の意見はこんな感じだ。

「私も同感よ。はぁ・・・なんであんなチームに・・・」

「お嬢様。私はいつでもお嬢様の味方でい続けますから、安心して
くださいね」

「あんたもあんたよ。正直、あんたも不安要素なのよ。力が未知数
だし。まあ、いいわ。期待しておく。あんたは普通のやつとは違う
みたいだし」

「普通とは違う・・・？とは？」

「貴族の子供をやっていると、人の本質を見る力があがるのよ。あ

んたの本質を言葉で表すと・・・

得体がしれないという感じね。それに、あんたの中に何かもつと別のそう、何か白くて黒い者がいるという感じ。言葉に上手く出来ないけどね」

「そうですか・・・」

お嬢様はうつすらサタンに気付いているのか？貴族の本質を見る目・

すごいな。お嬢様が特別なのか？

（いや、儂が例外なだけじゃ。やはり常人でも儂のことをうつすを感じているのじゃろう。儂は例外すぎるから有り余る存在感だけは消しきれんくての）

例外？

（前にも言っただじゃろう？儂は例外じゃと。儂は時代が時代なら神と呼ばれたり、聖女と呼ばれたり、悪魔と呼ばれたりしたのじゃ）

神！？

凄いな・・・

（まあ、本物の神ではないが・・・扱う力が大き過ぎたからそう呼ばれる様になったの）

つまり、お前は俺の中にもうすす黒い気配を周りに放っているのか。

（まあ・・・そうなる・・・のう）

まあ、いいけどな。

（ほつ。怒られなくて良かったぞ）

なんか言ったか？サタン？

（いやいや、ただ主様が寛大だと思っていただけじゃ）

変な奴だな・・・

俺はそんな事を思いながら帰路に着く。

センターハート家屋敷中庭―

俺はいつもの様に修行していた。ラザイン様がいらしたが、一緒に修行してもらったのはやめてもらった。サタンに指南してもらったほうが早いからな。

強くなるのが。

凡人な俺でも分かる。サタンが俺に教えている事は特別なものばかり。

一般の戦士じゃ使えないものばかりだ・・・

例えば・・・

カウンター・カウンター
反射の反射

これはサタンの技。相手の魔法の魔力と自分の魔力を同程度ぶつけて相殺させる技。発生が早く扱いやすいらしい。

と、こんな風に変わった技ばかり覚えさせられる。

まあ、便利なんだが。

サタンがパートナーになってから大分助かっている。目に見えて強くなっているのを感じるのは嬉しいしな。

それに、サタン曰く、

（主様は覚えが良いのう。天才じゃ。いや、天才どころではないのう。ここまで来るともう、例外的な才能じゃ）

俺がサタンに教えて貰っている技を成功する度に言われる。

どうやら、反射の反射をはじめサタンの技は習得難易度が高いらしい。

しかし、その技達を成功させるのを見てつい、漏らした言葉だそう
だ。

俺はサタンに修行を手伝って貰っているが、強くなっているのだろ
うか？

そんなことを修行中に考えるたび剣の素振りの速度が上がる。

どうしようもなく不安だ。

俺自身の強さのことも、サバイバル演習のことも、チームのことも。

お嬢様に聞いた話ではサバイバル演習が行われる場所では魔物も放
たれるらしい。

サバイバル演習では相手チームのメンバーを一人倒す度にポイント
がもらえるようになっていいるらしい。

ポイントはチーム共有。

魔物を倒してもポイントが手に入る。

ついでに、チームのメンバーが全滅するか最終日の終わりまでサバイバルは続くらしい。

つまり、チームにメンバーが一人でも残っていれば、サバイバルは続行される。

全滅かサバイバルの終了時のポイントがチームの点数。

成績とトーナメントに参加できるチームが分かるわけだ。

ついでに、サバイバル中は一定量のダメージを超えたら医務室に送られる魔法が生徒達にかけてあるので、死人はでない。

模擬戦の時と一緒にだ。

まあ、ルールはこんな所か。

不安は残るが・・・今の俺が出来る事といったら・・・

修行とサタンに助言をもらう程度。

まあ、負けるわけにはいかない・・・

それよりもお嬢様には傷一つつけさせない事の方が重要か。

解決策は無いのに問題は山積みか。

来週。

サバイバル演習の三日間。

まあ、頑張るか。

どうやら俺だけはこの慌ただしい日常の中でたいして変わってないらしい。

第二十四話（前書き）

読んでくれた方々に私からの精一杯の感謝を。本当にありがとうございます！

第二十四話

結局、何も出来ずにサバイバル演習の日になってしまった・・・

今日から三日間、ポイントを稼ぐために魔物を倒したり、敵チームと戦わなくてはいけない。

ついでに、サバイバル演習にいく学生には事前に時計が支給されており、その時計が戦いを記録しているので、ポイントに虚偽の報告は出来ない。

つまり、戦いの記録が残るのでポイント制のサバイバル演習のルールにイカサマはないということだ。

よかった・・・

そして、俺はその時計を身につけ学園の敷地内にある森？の前に来ていた。

「ここが、サバイバル演習が行われる大樹の森だ！別名は始まりの森。みんなしつかり全力を尽くせ！魔物もそんなに強くないから大丈夫な筈だ。お前ならやれる。頑張つてこいよ。じゃ各チーム五分ごとに森に入れ」

リーゼ先生が俺等を激励してくれる。

不安感は拭えないが。

そして、俺たちのチームはついに森へと入る。

大樹の森―

「まずは一体何をしたら良いんでしょうかね？」

ティナがみんなに聞く。

「さあ、分からないわ。サバイバルなんて始めてだし・・・」

お嬢様が言う。

「俺も知らねえなあ。まあ、とりあえずは魔物と他チームを倒せば良いんだろうが。余裕だろうが」

ケイルは樂觀視しているな。

「とりあえずは自分達の野営の場所と食料と水の確保ではないでしょうか？」

俺はそう進言する。

「はあ？野営だあ？めんどくせえ。一日目で相手チームを全て全滅させりゃいいだろうが。さっさと殺りにいくぞ」

ケイル・・・お前はサバイバル舐めてるよな？

「そんな・・・無理です。今は様子を見るべきでは？」

「様子見だあ？俺はそんな事知ったこっちゃねえな。それに雑魚女に意見される筋合いもねえ」

そう言われティナも無言になる。

はあ・・・

重！雰囲気重！普段暗い俺でさえこの雰囲気は辛い。お嬢様もかなり困っている。

セリアは一言も喋らない。

「んで結局どうすんだあ？ロイとセンターハートはどうするつもりだ？」

あ、一応俺たちとはチームのつもりなんだな。ケイルは。良かった。足並みを合わせる気はあるようだ。

「俺は準備は周到にしておいた方がいいと思います。即ち野営と食料の確保をすべきだと思いますよ」

「私も同感ね。サバイバルなんてした事ないし、慎重に行きたいわ。荷物持ちと同じ意見なのは少し癪だけどね」

「オイオイ。センターハート、ロイ。そんな事してたら日がくれちまうぜえ？」

「なら野営する場所で籠城するのはどうでしょうケイル様？」

「籠城だあ？」

「はい。野営する場所と食料とある程度の水を確保したら、野営地でずっと敵を待つという作戦です」

「敵が来なかったらどうすんだ？ロイよお」

「そのためにあえて目立つように焚き火をします」

「焚き火だと？」

「そう焚き火です。キャンプファイアー並の焚き火。そんな事をしたら凄く目立ちます。」

つまり、私たちはここにいてとアピール出来る訳です。つまり敵から俺たちの所へよってくる」

「カウンター狙いかあ？まあ良いんじゃないか？」

「荷物持ちにしてはいい意見ね。少し危険な気もするけど・・・これなら私たちが動く必要もないし敵チームからの罠にかかる心配もない。私も賛成でいいわ」

「私もそれで良いと思います。何より危険が無さそうだし・・・」

ティナがつぶやく。

「セリアさんはどう？」

コクッ。

彼女は喋らないが頷いた。

とりあえずのチーム全員の意見の一致。

こんな事を決めるだけなのになんでこんな殺伐としてるんだ？

はぁ・・・

野营地ー

とりあえずチームの籠城の準備は出来たといっておこう。

途中、ティナが川に流されたり、お嬢様とケイルで敵チームをいくつか壊滅させたりと色々あったが、まあ些細な問題だ。

（些細な問題かの？それは？）

まあ、ポイントはチーム共有だから、戦闘に参加しなくてもポイントが入ってくるのは不思議な気分だったかな。

右手の時計にしっかりとポイントが記録されていた。

（そういうことではないのじゃが・・・）

まあ、後は焚き火をして敵を待つだけ。燃やす木材も集めた。準備は万全だ。

「準備はよろしいですか？みなさん」

「私は大丈夫よ。荷物持ち」

「俺もだ」

「わ．．．私も大丈夫です」

セリアも頷いたか．．．？

まあ、多分頷いたのだろう。

「では始めますよ？この焚き火をしてからはおそらく敵が奇襲をしかけてくるでしょう。常に注意を頼みます」

「「分かりました（ああ）」」

俺が焚き火を始める。キャンプファイアー並の焚き火。

目立つ目立つ。

音もパチパチと薄暗い森で響く。

さて、籠城の始まりだ。籠城という表現は比喻だな。

ガサガサ。

隠密行動とはほど遠い足音が俺らの方へ向かってくる。

敵チームか？

魔物か？

どちらにしても戦闘が始まるまで後僅かの様だ。

第二十五話

俺たちは近づいてくる気配に息を殺す・・・

ガサガサ

森の木々を何かが横切りこちら側へくる。

「みんな！戦闘準備！」

お嬢様の言葉で俺は警戒を敵への強める。

「何は出よーが余裕だな」

ケイルが言う。

そして、出てきたのは・・・

「おいっみんな！敵チームだ！」

敵チームのフルメンバーだった。

「あれはケイルにアメリカさん！」

「やべえ！一年トップクラスじゃねえか！」

「ケイル君とアメリカさんかぁ・・・分が悪いね・・・」

「ここは逃げたほうが良くないか？」

「」「」「うん（はい）」「」「」

敵チームは一年トップクラスの二人を見て退却を選んだ様だ。

だが・・・

「そんな事誰が許すと思っただぁ？あぁ？」

ケイル・・・貴族なのにお前はチンピラか？

「何！早い！」

「敵に背を向けるなんてなあ。甘いぜ！ウィンド・カッター！」

ケイルの拳から無数の風の刃が形成される。

「ぐう！痛えっ！」

「避けれな！」

今で二人が強制医務室送りに。

ケイルの魔法が直撃したもんな。当然か。

「みんな！くそ！残った俺たちだけでも逃げるぞ！」

「わかった！」

「うん！」

残る敵チームの三人も急いで逃げようとしたが・・・

お嬢様の使い魔炎龍に行く手を阻まれる。

「アメリカさんの使い魔！」

「まずい！」

「こつちも使い魔を！」

そうして敵チームも妖精、獣の類のものを召喚する。だが・・・

「すまないわね。皆様方。だけど負けたくはないのでやらせていただきます。炎龍！プレス！」

「ギャオーーーーー！」

炎龍の口からプレスが放たれようとしている。

ケイルとの戦闘を思い出して俺もビビる。

そして、炎龍のプレスが敵チームへー

当たる。

直撃だ。

使い魔ごと。

あれはー

(強制医務室送りじゃの)

ああ。そうだなっ。

敵チーム悲鳴をあげてなかったが、大丈夫だろうか？

戦闘はあっさり終わったな。

ティナは二人をすこし怯え？ながら見ていた。

「ああ。くそつまんねえ戦いだ」

「確かに敵としては物足りなかったですね」

この二人が同じチームって・・・

パワーバランスおかしくね？

セリアもティナもそこまで弱くは無いし・・・

ああ。そうか。だから俺がいるのか。

はあ・・・

ケイルに一応勝ったんだけどなあ・・・

弱く見られてんのかなあ。

なんかショック。

まあ、いいが。

とりあえずこの籠城作戦でわかった事はケイルとお嬢様がいれば大抵のチームには勝てるということか。

俺としてはお嬢様には闘ってほしくはないんだが・・・その辺をうるさく言つとお嬢様に嫌われそうだから、言わないでおく。

敵もお嬢様より弱い様だし。

焚き火のための木々を集める時に出会った魔物も俺一人で倒せたし。

とりあえずは安心か？

「お疲れ様です。お嬢様。ケイル様」

「劳いなんていらねえよ。敵も近くにいなえ様だし。俺は寝る。敵が来たら起こせ」

そう言つてケイルは簡易テントに・・・

まあ、いいか。

「私もとりあえずは休むわ」

「分かりました」

お嬢様ももう一つ設置してある簡易テントに。

セリアとティナもそのテントに入っていく。

みんな休む感じか？

簡易テントは二つしかない・・・

はあ・・・

夜はケイルと寝るのか・・・

嫌だ・・・

そうして、俺たちは順調に魔物、敵チームを倒しポイントを稼いでいった。

ついでにケイルは寝相が悪かった。

おかげで寝不足だ。

まあ、サバイバルは順調に終わりそうだ。

最終日までそんな安心感の中で過ごした。

だが三日目。そう。サバイバル演習最終日のことである。

俺たちは遭遇してしまった。

惚けた心の中で。

どこか舐めていたサバイバルで。

白銀の美しい龍に。

とても美しい敵だった。

そして、殺し合いになった。

これは、俺たちのサバイバル最終日のことである。

第二十六話（前書き）

お気に入りが九十件突破！嬉しい限りです。あと私の小説は前置きが長いかもしれませんが許して欲しいです。

第二十六話

サバイバル演習最終日。

この「籠城作戦」で寄って来た敵チームや魔物はほぼお嬢様とケイ
ルが撃退してくれていた。

ときたま、見逃した敵などは俺たちが倒している。

順調過ぎるほど俺たちのサバイバルは上手くいつていた。

誰も医務室送りにならず、ポイントもかなり貯まった。

もし、ここでチームが全滅したとしてもトーナメント入りは確実だ
ろう。

本当に全てが順調だった。

不自然過ぎるほどに。

そして、その不自然さを正す為にとってつけて現れたような白銀の
龍と俺たちは出会ってしまった。

安心感があった。

だが油断はなかった。

俺たちの警戒をかくぐり現れた巨大な龍。

野営地にいた俺たちは咄嗟に戦闘態勢に入る。

「なんだあ？このデカブツは？ずいぶんでけえ魔物だなあ？まあ、倒せばいいか」

ケイルが言う。

「ええ、そうね・・・」

お嬢様も同意している様だ。

今思えば、俺たちはここからすぐに逃げるべきだったのかもしれない。

油断はしていなかった。

だが驕っていた。慢心していた。

だから、正常な判断が出来ていなかった。

だから、俺たちは選んでしまった。

その白銀の龍と戦うことを。

ティナは白銀の龍の正体を知っていたというのに……

「あれは……トリフロスです！なんでサバイバル演習を行っている場所にこの魔物が・
・トリフロスは王国軍一個師団くらい引つ張り出してこなければ勝てないのに……危険です！皆さん退避しましょう！」

ティナが叫ぶ。

「うるせえぞ！雑魚女！戦闘に集中してんだ！」

ケイルも叫ぶ。

「先手はこちらから打ちましょう！いけ！ファイア・ブラスト！」

お嬢様が白銀の龍トリフロスに向かい中級魔法を放つのだが・・・

「効いていない・・・の・・・ですか？」

トリフロスに当たった中級魔法だがトリフロスの硬い龍の鱗の前には無効化されてしまっていた。

「センターハート！何してやがる！本気でやらねえとこいつには負けるぞ！」

「うるさいですわね！ケイルさん！こちらでも本気で魔法を行使しました！」

「チツ。まあいい。今度は俺の魔法をくらってもらうぜえ？デカブツ！くらえ！ウインド・ストーム！」

だが・・・

トリフロスは無傷だった。

まるで美しいままだった。

「オイオイ。中級魔法を無傷だあ？とんだ化け物だ！ははっ！楽しくなってきたあ！」

ケイルが戦闘狂になりつつある。

「皆さん退避しましょう！トリフロスは学生レベルじゃ勝てないんです！」

「いちいちうるせえなあ。雑魚女。やっと楽しめそうな敵と出会ったんだ。殺らなきゃ損だろ！」

「すみません。ティナさん。私も貴族としてのプライドがあるので。こんな龍に負ける訳にはいけないのです！」

そうして、お嬢様とケイルは同時に使い魔を召喚する。

「「お前あなたと協力するのは癪だが（です
が）（ここは共闘してもらっぜ（もらいますわ）！」

二人の前に巨大な龍が現れた。二匹。トリフロスには劣る大きさだったが、十分大きい。

俺とティナとセリアはただその荘厳な様子を見ていることしか出来なかった。

そして、俺は思っていた。風龍と炎龍がでた以上トリフロスは負けるだろうと。

「行きますわよ！炎龍！ブレスを！」

「ギャオーーーーー」

「こっちも全力のブレスをくらわせてやれ。いけ！風龍！」

「ギャオーーーーー」

二つの龍がブレスの準備を始める。

そんな中始めてトリフロスが攻撃動作に入った。

「ギャオーーーーー!!!」

トリフロスもブレスの準備を始めている様だ。

まあ、多勢に無勢だ。トリフロスが勝てる訳もない。

戦闘は終わったも同然ー

(主様。悪いことは言わん。早くこの場から逃げるのじゃ)

どうしたんだ？サタン？

(凄まじい衝撃がくる筈じゃ。あの龍達、特に白銀の方。あの魔力の量からしてあやつのブレスはやばい)

白銀の龍のブレスがやばい・・・？

お嬢様がブレスの直撃コースに・・・

お嬢様！！

（待て我が主様よ！待つんじゃ！いくら主様でもそいつに挑むのはまだ早い！）

お嬢様が！お嬢様が危険なんだろう？気にしてられない！

だが無情にも三体の龍のブレスの準備は終わってしまっていた。

「「「ギャオーーーーー！！！」」」

そうして風と火のブレスと白銀のブレスがぶつかりあう。

数秒ブレスは拮抗していたが、徐々に白銀のブレスが二つの龍のブレスをおし始めた。

「何！風龍のブレスが・・・押されて・・・」

「炎龍も・・・ですわ・・・」

そうして一年トップクラスの二人の前に白銀のブレスが襲いかかる。

「お嬢様だけは！守ってみせる！」

俺はそのプレスに割ってはいる。

「気仙花！こい！」

青い刀身の剣を俺は出す。

「どこまで威力を軽減できるかわからないが、不可視の斬撃！」

俺は白銀のプレスに向かい視えない斬撃を放つ。

だが・・・

「くそっ！これでも！お嬢様！」

俺はお嬢様を押し倒してプレスから守ろうとする。

「ちょ、ちょっと！に、荷物持ち！」

「すみません。お嬢様。でもお嬢様だけは・・・」

不可視の斬撃でも相殺し切れなかった白銀のプレスが俺たちを包みこんだ。

その瞬間激しい爆音がした。

「うわぁ！！！」

（主様。今から魔力のオーラを主様に纏わせダメージを軽減させる！待っておれ）

俺に魔力のオーラが纏わりつく。

なんとか・・・持ちこたえることが出来た。

「はあはあ・・・お嬢様・・・お嬢様！」

「うつ・・・」

「お嬢様！お嬢様！俺のせいで！」

「あんたのせいじゃないわ。私たちが戦う相手を見誤っただけ。それに、あんたは身を挺して私を守ってくれた。感謝してるわ。でもだからこそ・・・いつておくわ・・・逃げない。今の私たちじゃあの魔物には勝てないわ・・・」

お嬢様はそれだけ言って気絶してしまった。

医務室に送られてないからまだ大丈夫な筈だ。

「お嬢様・・・くそ！」

お嬢様を安全と思われる場所まで運ぶ。

安全かは保証されてないが、サバイバルなのだ。確実に安全な場所などないだろう。

そういえば、ケイルがいない・・・

医務室送りになったのか！

まずいな・・・

それにお嬢様を守りきれなかった・・・これが実戦なら・・・お嬢様は・・・お嬢様は！死んで・・・いたかもしれない・・・

ちくしょう！

ちくしょう！

油断はしていなかった。ただ驕っていた。

今の自分達ならこの龍を倒せると。

（模擬戦の前にも言ったじゃろうに。緊張感を忘れてはならぬと）

ああ・・・そうだったな・・・サタン・・・

今回の事は俺の慢心、チームの不仲が原因だ。

ティナの声に耳を傾けていれば・・・

後悔は尽きない・・・

！

トリフロスが野営地の前に移動した！

まずい！

あそこにはセリアとティナが！

行かなきゃ！行かなければ！

（本当にいくのかの？たいして仲は良くないのじゃろっ？ここにいればとりあえずは安全だと思うのじゃが・・・）

ああ、そうかもな。

でも・・・でも！

「守りたいんだ・・・同じチームのメンバーだから・・・それにお嬢様を傷つけた龍を俺は・・・俺は許せそうにない！」

ここで立ち止まる訳にはいかない！

行くんだ！

プレスを受けて傷だらけの俺でも何か出来る筈だ！

（やれやれ主様も難儀な性格じゃの。まあそこが良いのじゃが 儂もあの龍を倒すため協力しよう）

ああ・・・頼む・・・

お前の助力なしじゃあの龍を倒せそうにない。

さて、行くか・・・

お嬢様・・・少しだけ待っていて下さい・・・

そうして俺は全てをかけてトリフロスと殺し
合いをすることになる。

第二十六話（後書き）

なぜ学生レベルじゃ太刀打ちできないトリフロスがサバイバル演習の森にいたかは近々明かしたいと思います。

第二十七話（前書き）

急なティナ視点からのスタート。

第二十七話

トリフロスがこちらへ向かってくる。

私は怯えていた。

学年一年トップクラスの二人でも勝てなかった龍に。

「セリアさん！早く逃げましょう！」

「無理・・・あの龍は動きが早い・・・逃げられない」

いつになくしゃべるセリア。

「でも！」

「私達はどうせ死なないし、・・・それにロイ君の安否が分からない以上ここに残るのが得策・・・」

「それでも・・・トリフロスは怖いです・・・」

「それは・・・確かに・・・」

セリアとティナもやはり怯えている。だが二人とトリフロスの距離は近い。

そして、トリフロスが二人の目前に迫る。

「仕方ないです！もう闘うしかないですね！」

ティナは覚悟をきめた。

「私も闘う・・・」

セリアも闘う様だ。

「サバイバル初の実戦です・・・アメリカさんとケイル君に戦闘を任せていたのが仇になりました・・・」

「私も初戦闘・・・」

トリフロスが二人を認識した。トリフロスが二人に向かい腕を振り下ろす。

「格闘も出来るの！？まずいです・・・ファイア・アロー！」

ティナがトリフロスの腕に初級魔法を放つが腕の勢いは止まらず、ティナの方へ振り下ろされた。

「わぁ！危なかった・・・もうすぐで当たるところだった・・・」

だが、トリフロスはティナへの攻撃を筈した様だ。

「幸運・・・」

「確かに・・・」

ティナも頷く。

「今度は私の魔法・・・アイス・シャワー」

セリアが魔法を行使するがトリフロスの鱗に弾かれた。

「私の・・・初級魔法も・・・駄目・・・」

セリアが落胆する。

「アメリカさんの中級魔法も使い魔も通用してなかったよね・・・？トリフロスには。ということは私たちにトリフロスにダメージを与える手段がない！」

「・・・まずい」

そして二人は一つの結論を出す。

この龍には「勝てない」と。

そして二人に向かってトリフロスがブレスの準備を始める。

「あれをくらっても死なないと思うセリアさん？」

「多分・・・医務室行きになる筈」

そんな話を話している二人の前に・・・白銀のプレスが襲いかかる
うとしていた。

ティナとセリアは衝撃に備え目をつむる。その瞬間―

「ティナ様！セリア様！サタン！魔力を俺の限界手前まで貸してく
れ！」

走ってきた男が―

「くそっ！間に合え！ダーク・ナイト」

夜の名を冠する魔法を行使した―

ティナとセリアは目をつむって衝撃に備えていたがいつこうにこちらへプレスが飛んでこない。

不思議に思い目を開けると・・・

幻想的な夜の闇が白銀のプレスを打ち消していた。

「辺りが暗い？これは魔法？さっきロイ君の声が聞こえてきた気がしたけど・・・」

ティナが困惑する。

「これは何？・・・まさか空間支配魔法？・・・いったい誰が？」

セリアも戸惑っている。

「間に合って良かったです・・・ティナ様・・・セリア様・・・」

「「ロイ君！」」

ティナとセリアが見た先にボロボロのロイが立っていた。

「はあはあ・・・俺の防御魔法を張らせていただきました。これであの龍のプレスは封じることが出来ました・・・少しはこれでまともな戦闘に・・・」

ロイがボロボロになりながらも、言葉を紡ぐ。

「ロイ君・・・そんな傷で・・・ありがとう・・・」

ティナが感謝する。

「いえ、当たり前です」

「私からも・・・ありがとう・・・」

セリアもお礼を言った。

「いえ、当たり前のことです。仲間を助けようとするのに理由はありません」

「私・・・あなたがケイル君を倒した時の模擬戦を見ていなかったんだけど・・・トリフロスのプレスも防ぐような魔法を見せられてそれが本当のことだったんだあってはじめて感じました。」

「ともかくです！ロイ君！この龍を倒すのに協力してください！あなたの力が必要なんです」

「初めからそのつもりで来ました。俺からもティナ様にお願いします。セリア様にもお願いします。俺と共にあの龍を倒してくださいませんか？」

「もちろんです」・・・もちろん」

そうして三対一の死闘が始まる。

第二十七話（後書き）

- ・ 始めての主人公以外のキャラの視点。誤字脱字があつたら報告よろしくお願いします。というかトリフロス戦引ッ張りすぎですよね・

第二十八話

俺は巨大な龍と向かい合っていた。

「まずは、ティナ様。あの龍の情報を少しでも教えてくれませんか？」

ティナはケイルがあつた龍と戦う前あつた龍について何か言っていた。何か有用な情報が聞けるかも……？

「分かりました！あの龍の名はトリフロス。セントラル王国軍の一個師団でも苦戦するレベルの魔物です。正直な話、私たちには荷が重い相手です」

軍の部隊が相手に苦戦……？

そんな魔物が学生のサバイバル演習に？

わざわざ生徒たちに格安医務室送りツアーを開くつもりなのか？この学園は。

いくら死なないように安全装置の魔法があるとはいえ……

生徒たちに圧倒的な絶望でも与えたいのか？

しかし、どうにも引つかかるな。

あの学園を守るために俺を殺そうとした学園長が軍が相手でも苦戦するような魔物を不用意に使うだろうか？

それに学園長の性格からして、あんな龍を演習に使うとは思えない。

ならば、なぜあの龍が？

元々、この森に生息していたのか？ いや、違うな。学園の敷地内のこの森にあんな魔物がいる訳がない・・・と思う。

森の生態系が崩れるからな。

ではなぜ？

学園の警備を突破してあの龍がこの森に入れるか？

なぜ、軍が苦戦するレベルの魔物がここにいるかがやっぱり分からない。

まさか・・・誰かが人為的に？

考えすぎか？

冷静に考えてみるとあの龍についてはおかしいところだらけだ。

学園の警備はやっぱりあんな巨体では潜り抜けられないだろうし、いつの間にか俺たちの前に現れたのも不自然といえは不自然だ。

（主様の思考を一つにまとめるとあの龍は「怪しい」ということじやな？）

ああ・・・怪しさだらけだ。

まあ、ティナの情報から読み取れることはこのくらいか・・・

戦闘の役にはたたない・・・

今の俺の目的は二つ。

まずは、あの龍・・・トリフロスだったか？そいつを倒すこと。

お嬢様のところまで行かれたら気絶しているお嬢様ではひとたまりもないからな。

お嬢様のためにもこいつは倒すべきだろう。

もう一つの目的は、お嬢様の保護。

気絶しているお嬢様を放置というのはヤバイ。他のチームや魔物に気絶しているところをやられてしまうかもしれない。

この問題も重要だ。

つまり俺の今やらなければならないことは・・・

（あの龍を・・・）

「倒すことだ！」

そうして俺はトリフロスまで走る。

「私たちも援護します！」

「私も・・・」

ティナとセリアも援護してくれている。だが・・・

（トリフロスとやらにはまったく効いてなさそうじゃのう）

ああ、そうだな。

初級魔法はビクともしないってことだな。

ならば・・・

「気仙花！来てくれ！」

俺は魔武器を呼ぶ。そして、魔力と気力を同時に混ぜる。

「綺麗です・・・」

「美麗・・・」

ティナ達が何か言っているが、構っている暇はない。

俺はトリフロスの足元まで走り、トリフロスに切り込む。

「はあ！」

気力と魔力を練りこんだ一撃だ。効いた・・・か？

「ギャオーーーーー！」

僅かだが傷を与えられた様だ。

（どうやら気仙花の一撃は通用したようじゃの）

ああ。少しでも傷を与えられたんだ。光明は見えて来た。

「すごい私たちじゃ傷一つ与えられなかったのに・・・」

「確かに・・・」

ティナ達が言う。

（主様！気をつける！トリフロスが腕を振り下ろしてきておるぞ！）

不味いな。あの巨体の一撃をどう防ぐ・・・？

仕方ない。

「不可視の斬撃！」

俺の魔武器のとおっておきの一撃。これなら！

「ギャオーーーーー！」

「不可視の斬撃なら腕を切断くらいしてくれると思ったが・・・思ったより鱗が硬いな。切り傷レベルの傷しか与えられないか・・・」

だが、それでも収穫か。

今の一撃でトリフロスもキレた様だ。

「ギャオーー！」

「くっ！なんて風圧だ！吹き飛ばされそうだ」

それに威圧感。

後ろの二人がああ威圧感に気を失いそうになっている。

「このままでは・・・」

（あの二人が死ぬな。いや、医務室送りじゃったか？死ぬのではないのなら、とりあえずは捨て置いたほうがよいかの？）

「そういう訳にもいかない。あの二人は俺に協力してくれた。得て

のしれないこの俺にな。だから・・・救えるのなら・・・救いたい・
・お嬢様を守り通すことはできなかったが・・・あの二人くらい
は救ってみせたい！」

（それが主様の心か。なら僕もその望みが叶うよう尽力しよう）

頼む！サタン！

俺は怒るトリフロスに突っ込む。

トリフロスがブレスを俺に向けて放ってくる。

「無駄だ！トリフロス！サタンと俺の魔法の防御がある限りブレス
は効かない！」

白銀のブレスは深い闇に打ち消された。

「ブレスは封じたこれで・・・！」

倒せるか？この龍を？

トリフロスはブレスが効かないと分かったのか・・・

その巨軀を活かし暴れ始めた。

「何！無理やり暴れ始めた！これは・・・」

（ブレスよりも厄介じゃのう。攻撃範囲が広すぎるしの）

これでは二人も巻き込まれる！

不味い！

無理やりにも止めてやる！

（正気か！主様！あんな状態のトリフロスに突っ込んだら、ひとたまりもないぞ！）

でも、俺が行くしかないんだよ。

この二人を助けるためには・・・

だから・・・

行つてやる！

俺は再びトリフロスに向かって走りだす。無数の衝撃波に歓迎される。

「ぐっ！」

（主様！）

俺は気仙花を乱舞させる。

「少しでも・・・あの二人を傷つけさせないために・・・」

（っ！主様！もうよい！主様だけならまだこの攻撃から抜けられる！二人は置いていくのじゃ！）

それは・・・出来ない！

俺を少しでも信じてくれた二人を俺は見捨てられない！

もう置いていきたくは無いんだ！

俺も見捨てられたから分かるんだ！

だから二人は俺の全力で助けなきゃならないんだよ！

「ちくしょおお！お嬢様に続いてこの二人も守れないのかよ！くそ！！！」

くそ！

くそ！

時折、不可視の斬撃も繰り出しているというのに・・・

トリフ羅斯は止まらない。

俺の全身が打撲だらけになる。

元々、傷だらけだった俺にはかなりの痛手だ。

俺は吹き飛ばされてしまう。

「しまった！」

そして、龍に攻撃は容赦なく二人を襲った――

そうして二人は消えた。どうやら医務室送りになった様だ。

「また、守れなかったのか？俺は。俺の側にいた二人すら傷つけさせてしまったのか？それじゃ何のために強くなったんだ？俺は、俺は――」

（主様！自分を責めるな！）

「くそ……くそ……俺は……」

（主様！しっかりするのじゃ！主様！）

二人を吹き飛ばしたトリフロスは俺に眼を向ける。

そつえば、何でトリフロスの攻撃を深く受けた俺が医務室送りになつていないんだ？

（それは俺が今まで主様に魔力の供給を利用して主様に薄く魔力防御をしていたからじゃ）

「ああ・・・魔力の供給か・・・俺の防御のために使っていたのか・・・」

俺は立ち上がる。

「ならサタン。頼みがある。今まで俺の防御に使っていた魔力を全て攻撃に回してくれ！」

（それは無茶じゃ！主様に攻撃するために魔力を与えようとも思つたが、主様は傷だらけだった。だから防御に魔力を回したというのに。攻撃に魔力を回したら、主様に負荷がかかり過ぎる。駄目じゃ。あの荒技は今のためせん）

「俺は負けないんだ・・・誓ったから。だから勝たなきゃいけないんだ。守りたいから。まあ、今の俺は大事な仲間を守り損ねた力

スだけどな」

でもな・・・

守れなかったからこそな・・・

お嬢様。ティナ。セリア。それに・・・ケイル。

この龍に傷だらけにされた四人のためにもな・・・

俺は・・・

負けられない！

その瞬間、ロイから多大な魔力が溢れる。

（なっ！俺が許可していないのに！魔力よ止まれ！・・・止まらな
いじゃと！何故じゃ！俺の魔力が主様に無理やり・・・これでは主
様が・・・）

「いくぞ！トリフロス？さっきまでの俺と思うなよ？」

「ギャオーーーーー！」

トリフロスが腕を振り下ろす。ロイは魔法による身体強化でそれを躲す。

「お前の攻撃はこの程度か？なら今度はこっちから行かせてもらっぞ」

そう言っただけでトリフロスに両手を突き出す。

「俺はもうキレてんだ。トリフロス。悪いがこちらも死ぬ気で魔法を使わせて貰う。いくぞ！」

そして、ロイの両手から魔力の奔流が出る。莫大な魔力がトリフロスに襲いかかる。

「ギャオーーーーー！」

「悪いな。トリフロス。これは魔法でもなんでもない。ただサタンの莫大な魔力を利用した攻撃だ」

これが、俺の全力の攻撃。

サタンが協力的ではない、今俺が思いついたのはこのくらいだ。

そうして、トリフロスは―

倒れ、動かなくなった。

「倒したか？」

ボロボロの俺はただ一人呟く。

「魔物を倒したのに時計のポイントに加算がない？まさか、トリフロスがまだ―いや確かに死んでいるな。ということは、やはり―学園側が把握していない魔物という事か」

ふう。しかしもう限界だ。

これ以上は何も考えられない。

そうだ魔力をサタンに返すか。

サタン？

（死ななかったから良かったものを・・・主様の馬鹿者！）

すまなかったな。サタン。どうしてもあの龍に勝ちたかつ・・・うつ！

（主様！大丈夫か！主様よ！）

大丈夫じゃないが・・・まだ倒れる訳にはいかない。

まだお嬢様を保護していない。

お嬢様をお迎えに行かなければ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043x/>

タランティルス^の例外少年

2011年11月21日11時37分発行